

## 政治化される「共生」

——エチオピアにおける宗教対立をめぐる——

石原 美奈子

### キーワード

エチオピア オロモ イスラーム 共生 宗教対立

### はじめに

エチオピアは、80 を超える民族から構成される多民族国家であるとともに、キリスト教徒とムスリムが混在する多宗教国家でもある<sup>1</sup>。この多民族多宗教国家は、19 世紀末にエチオピア中央ショワ地方を領有する王メネリク<sup>2</sup>が北部のキリスト教諸侯国を統一し、続いて南部一帯を軍事征服し、領域国家としてエチオピアが成立した結果うまれた。紀元前の「イスラエル王国のソロモン」に系譜を辿るとする王統神話に支えられたキリスト教の王朝が支配するエチオピアは、民族的にはセム系アムハラ、宗教的にはキリスト教徒が権力中枢を独占的に掌握するヘゲモニー体制をしく帝国<sup>3</sup>となった。19 世紀末に軍事征服された地域には、それまでキリスト教徒もアムハラもいなかった社会に、キリスト教徒アムハラが移り住み、教会が建てられ、町（ケテマ）<sup>4</sup>が建てられた。南部諸社会においてキリスト教徒アムハラは、たとえ行政官や封建地主ではなくても「征服者」「搾取者」とみなされ、教会はそれを象徴するものとなった。帝政下で、エチオピア正教会が占める特権的な地位のもとで、ムスリムなど他の宗教信徒は憲法で恩恵的に認められた「宗教信仰の自由」を享受した（石原 2014b; 2014c）。

だが、エチオピア正教会の特権的な地位は帝政の崩壊とともに解消された。帝政崩壊後

---

<sup>1</sup> 2007 年の統計報告によると、人口 7375 万人のうち、正教会系キリスト教徒が 3209 万人（43.5%）、プロテスタントが 1366 万人（18.5%）、カトリックが 53 万人（0.7%）で、ムスリムは 2504 万人（33.9%）であった。

<sup>2</sup> メネリク（1844 年生）は、（現在エチオピア中央部の）ショワの領主サハレセラシエの孫として生まれ、皇帝ヨハンネス 4 世より 1878 年に王位を授かった。資源豊かな南部一帯を支配下に置くために軍勢を派遣して征服し、今日のエチオピアの礎を形作った。1889 年には帝位につき、メネリク 2 世となった（1913 年没）。

<sup>3</sup> この場合の「帝国」とは、国内に一定の政治的権力を有する（「皇帝」より下位の）複数の「王」の中から台頭した「諸王の中の王（neguse negast）」である「皇帝」が統治・支配する国を意味する。

<sup>4</sup> ケテマ（ketema）は、もともと「頂点・頂上」を意味し、エチオピア歴代の王が軍隊とともに統治する軍営地をさす言葉であった。メネリク 2 世による南部征服により、南部に皇帝派遣の軍隊とその家族が駐在する要衝地を表すようになる。そこでは定期市が開かれ、教会が建てられた（Bustorf 2007）。

1974年から1991年5月まで続いた政権は、社会主義を標榜する労働党一党独裁体制（通称、デルグ<sup>5</sup>政権）をとるようになり、エチオピアは宗教と国家の分離を原則とする世俗国家となった。宗教活動が禁止されることはなかったが、宗教全般が公共領域において周縁化された（Eide 2000）。もっともムスリムは、それまで認められなかった権利（ムスリム祭日を国民休日とすること、エチオピア・イスラーム最高評議会の設立等）を認められるようになった。

17年間続いたデルグ政権が崩壊し、長年武力闘争を展開していたティグライ人民解放戦線（TPLF）が主導権を握る多民族構成の政党、エチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）が政権を掌握し、さまざまな領域で「自由」が認められるようになると、前代未聞の宗教ブームが沸き起こった（Abbink 2011; 石原 2014a）。宗教ブームは、帝政崩壊以降抑圧されていた活動が復活・復興したという側面もあるが、それだけではなく、情報・人・モノの移動が「自由化」されたことで外来の思想や団体へのアクセスが容易になったことによるところも大きい。その過程で現在ムスリム世界において一大潮流となっているイスラーム復興主義（サラフィー主義）もエチオピアに入ってきた<sup>6</sup>。イスラーム復興主義はムスリム社会を分断しただけではなく、キリスト教徒との関係にも亀裂をもたらした。この点は、エチオピア特有の化学反応であるといえよう。こうしてイスラーム復興主義の拡がりにより、各地で暴力をともなった事件が起きた。これらの事件は多くの場合、イスラーム復興主義に感化されたムスリムの若者がキリスト教徒や教会を襲撃するというかたちをとった。こうした動向のなかで、政府や NGO、メディアや知識人の間で、「共生」という言葉が、まるでそれがエチオピアの宗教事情の「伝統的なあり方」を表現するかのようによられるようになるのである。

エチオピアは、キリスト教とイスラームが大航海時代以前に受容された歴史をもつ点において他のアフリカ諸国と事情が異なる。キリスト教徒とムスリムは、共存と対立を繰り返しながら「共生」を目指した（Hussein 2006）。だがこの宗教間の「共生」は、平等な立場によって平和裏に実現されるものではない。エチオピアの歴史を振り返ってみると、キリスト教王国とムスリム王国の間には多くの場合前者を優位とする貢属関係が存在し、またキリスト教王国内に住むムスリムは「周縁的」「二次的」「外来」市民として扱われた（Abbink 1998; 石原 2014c）。エチオピア北東部ウォッロ地方はムスリムとキリスト教徒が共生する「エチオピアの縮図（microcosm）」（Ghelawdewos 2011）と称える見方もあるが、これは19世紀後半皇帝ヨハネス4世（在位1872-89）がウォッロでムスリムの強制

<sup>5</sup> デルグとは、軍部と警察からなる合同委員会をさす。軍人メンギスツ・ハイレマリアムが反対勢力を退け、独裁的で強権的な政治を行うようになる。

<sup>6</sup> もっともエチオピアにはじめてイスラーム復興主義が入ってきたのは、EPRDF 政権下ではない。すでに、イタリア統治期（1936-41）に、イタリア統治政府がムスリムのメッカへの巡礼を奨励した結果、メッカでイスラーム復興主義に感化されて帰国した人々がいる。そのなかに、ハッジ・ユースフ・アブドッラフマーンがいる。ハッジ・ユースフは、出身地のハラル（エチオピア東部のイスラーム古都）でイスラーム復興主義を教宣したが、聖者崇拜やスーフイズムに長年傾倒してきたムスリム住民から反発を受けた。その住民の側にたち、ハッジ・ユースフと対抗したのが、「アルアハバシ運動」の創設者シャイフ・アブダッラー（第4節参照）である（Erlich 2007）。

改宗を行った結果であることを考えると<sup>7</sup>、「統一と共生」の地として美化するのはあまりに表面的な捉え方といえよう。ウォッロは、エチオピアの中でも特異な宗教的特徴をもっている。キリスト教徒とムスリムとの結婚、双方向への改宗、そして双方の聖地を巡礼／参詣する慣習は、ウォッロ地方でとりわけ顕著である<sup>8</sup> (Meron 2015)。つまりキリスト教徒とムスリムとの関係は、エチオピア国内でも地域によって差異があり、その差異は歴史のなかで作り上げられてきたものである。

本稿では、「危機と再生」というテーマに関連づけて、現政権下での「自由化」によって宗教活動が活性化したムスリム社会のなかでも筆者が1992年以降調査を実施してきたジンマ県に焦点をあて、2000年以降に各地で起きた教会襲撃事件を「危機」ととらえ、それに対して「共生・寛容 (mechachal)」<sup>9</sup>を理念に掲げて事態の平常化をめざす政府・民間の取り組みを「再生」と位置づけて考察を展開する。

まず、第1節では本稿で取り上げるエチオピア南西部のオロミア州ジンマ県の概要を記し、第2節ではジンマ県における宗教の複層性について、歴史的変遷と形成過程に焦点をあてて検討する。第3節では2006年バシヤバシヤ町で起きた教会襲撃事件について、キリスト教徒側・ムスリム側の証言をもとに、その背景と原因をさぐる。第4節では、バシヤバシヤはじめ国内各地で起きたキリスト教徒・ムスリムの衝突や事件を受けて政府主導でとられた措置について述べる。

## 1. オロミア州ジンマ県の概要

1994年発布の憲法により連邦民主共和国となったエチオピアは、民族居住地域を基準に州区分を行った。オロミア州とは、クシ系オロモがマジョリティーを占める地域であり、エチオピアの最大民族であるオロモ<sup>10</sup>の居住地域の面積はエチオピア最大となっている。その中で、現在エチオピア南西部にある「ジンマ」という地名は、ジンマ県 (Jimma Zone) とその中心都市ジンマ市に用いられるが、本来は19世紀初めに成立したジンマ王国に由来する。ジンマ王国は、ギベ川流域にたてられた5つのムスリム・オロモの王国 (いわゆる「ギベ5王国 (Gibe Shanana)」) のうち、最後まで残っていた王国にあたる。ジンマ以外の4王国 (リンム、ゴンマ、ゲラ、グマ) は、19世紀末にショワ地方を中心に南部への征服活動を行っていたキリスト教徒アムハラ<sup>11</sup>の領主メネリクに征服され、王国は崩壊した。崩壊後、王国名は (グマ以外は) 郡など行政単位の名前に名残を留めている。これら4王

<sup>7</sup> ウォッロ地方でのムスリムのキリスト教への強制改宗については、Ficquet (2006)や Hussein (2001)を参照されたい。

<sup>8</sup> エチオピア南東部ファラカサに聖者廟があるムスリム女性聖者スィティ・ムーミナもまたウォッロ出身であり、キリスト教徒からの改宗ムスリムである (石原 2009b, Ishihara 2013a)。

<sup>9</sup> アムハラ語でメチャチャル (mechachal) とは、「許容する／寛容に扱うこと (to tolerate), お互いを許容し合うこと (to bear with one another), 両立できること (to be compatible)」 (Kane 1990) とある。本来独立した平等な立場にある集団なり個人が、相互の存在を認め合い、尊重しあうことを意味し、エチオピアでは主として宗教の文脈で用いられる (eg. Teshome 2012)。

<sup>10</sup> 2007年統計によると、国内のオロモ人口 (25,363,756人) は、エチオピア人口 (73,750,932) のおよそ34.4%を占める。

国が、メネリクが派遣した軍や行政官に対して武力蜂起を起こしたことで崩壊を招いたのとは対照的に、ジンマ王国は、王アッバ・ジファール2世(1932年没)がメネリクに対して莫大な上納金や貢納品の支払いの代わりに自治権確保の約束を取り付けた。だが王アッバ・ジファール2世の死後、自治は剥奪され、他の4王国同様、エチオピア帝国に組み込まれ、キリスト教徒アムハラ行政官が任命され、教会の建設も開始された。こうしてジンマ王国は滅んだ。だが王国の名前は、ジンマ王国の王都が置かれた都市と、郡(woreda)や県(zone)など行政単位をさす地名に残された。

### 1) 自然環境と生業

ギベ川の源流域にあたるこの地域は標高が1500m~2000mあり、豊かな土壌に恵まれ、モロコシやトウモロコシ、大麦、テフなどの穀物のみならず、果物やコーヒー・香料などの商品作物の栽培もさかんである。ジンマから、南方のゴジェブ川を渡ったところにある(南部諸民族州)カファ県にかけては、昨今道路や農地のための開拓による森林の伐採が行われているが、エチオピア北部高原地帯と比べるとまだまだ森林が残っている地域である。またこの森林地帯は「コーヒー発祥の地」として知られ(石原 2013b)、野生種コーヒーも残存していることでも知られている(伊藤 2012)。そしてアムハラ行政官もイタリア統治時代前から商品価値が高まっていたコーヒーの栽培を奨励していたこともあり、ジンマ県はコーヒーの一大産地として知られるようになった。最近では、コーヒーだけでなく、カート(Catha edulis)や各種果物などの商品作物の栽培もさかんである。

### 2) 人口・民族

ジンマは、ムスリム・オロモが人口の大半を占める地域である<sup>11</sup>。

この地域には、16世紀以降のオロモの拡散移動により移住してきたオロモ農牧民が、先住していたオモ系・クシ系の諸民族を「オロモ化」し定着した(Mohammed 1990)。オロモは、ワカ(天・神の意)を頂点とし、精霊(アヤナ・アテテ等)をその分身とする宗教観をもっており、民主的なガダと呼ばれる年齢・世代による政治体系を保持していた(Asmarom 1973)。定着したオロモ社会の中で貧富や威信の差が生まれ、クラン同士の対立抗争の結果、台頭した5つのクラン(Diggo, Awalini, Sappheera, Sayyo, Adami)を中心に5つの王国(それぞれ、Jimma, Gomma, Limmu, Gera, Guma)が形成された(Mohammed 1990; 石原 1996)。

19世紀には南のカファ、西のスーダン、北の紅海沿岸に通じる交易路を介した交易活動が活発になった。交易活動の担い手は、ムスリムであり、王国の庇護を受けた。これらムスリム商人(neggaadie)との交流から王や領主はじめ人民にもイスラームが受け入れられるようになった。こうして5つの王国は、周辺のアムハラ諸王国とは異質な、5つのムスリム王国となったのである(Mohammed 1990)。

<sup>11</sup> ただし、ムスリムでありかつオロモである人々がどのくらいの割合を占めているかを示す統計資料はない。国勢調査(2007年)によると、ジンマ県内人口(2,486,155人)のうち、ムスリム人口は2,129,321(85.6%)、キリスト教徒(エチオピア正教会・プロテスタント諸派・カトリック合わせて)353,777(14.2%)となっている。一方、民族別では、オロモ2,177,836(87.6%)、ついでアムハラ100,649(4%)、ダウロ31,842(1.3%)となっている。

20 世紀にエチオピア帝国に編入されてから、ジンマ地方の豊かさに魅せられて北部から大勢のキリスト教徒のセム系諸民族（アムハラ行政官・兵士や、ティグライ・グラゲの商人）が移住してきた。これらの人々は家族とともに、大半が都市（ケテマ）に定住した。

こうしてジンマ県は、農村部はムスリム・オロモが、都市部は北部出身のキリスト教徒のセム系移民と都市化したムスリム・オロモが住み着くようになる<sup>12</sup>。

## 2. ジンマ県における宗教

本節では、今日のジンマ県にみられる宗教の複層性を、①「在来」信仰、②イスラーム、③キリスト教、の3つに分けて、それらの特徴と変化の過程について概説する<sup>13</sup>。

現在、ジンマ県の過半（85.6%）がムスリムとなっているが、イスラームが民衆に広く受け入れられたのは19世紀であり、それ以前は「在来」信仰が保持されていた。ここで括弧付きの「在来」と述べるのは、信仰・儀礼のあり方についてはイスラームに改宗した後のヨーロッパ人旅行家が見聞した記録しか残っておらず、明らかにイスラーム的ではない要素をここで便宜的に「在来」と括弧しているに過ぎないからである。明らかにイスラーム的でないこれらの要素は、「オロモ的」ともいえない。オロモ化される以前のオモ系住民が北部のキリスト教王国との交流の中でキリスト教的祭祀を取り入れたものもそこに含まれる。したがって、ここでいう「在来」信仰とは、オモ系先住民の信仰儀礼＋キリスト教的祭祀＋オロモ的宗教といったところであり、それ自体が混濁的側面をもつ。19世紀にイスラームが導入された後も、「在来」信仰に関連する儀礼や習慣は全面的に放棄されたわけではなく、一部続けられていた。

### 1) 「在来」信仰

16世紀エチオピア南東部から移動と拡散を開始したオロモの一派が現在ジンマ県の位置する地域に到来した時、そこにはオモ系の言語を話す人々が農耕生活を送っており、一部王国も形成していた(Lange 1982)。オモ系の王国インナリアは、15世紀に北部高原に展開するキリスト教王国に貢属したが、17世紀にはオロモに征服された(Mohammed 1990)。インナリア王国の外部勢力との交流の有り様は、宗教的側面にも映し出され、19世紀にイスラーム化した後も一部残っていた。

たとえば、1840年代にエチオピア外交団を率いて北部のキリスト教王国を訪ねた英国軍人ハリスは、エンナーリア王国のあった地に建国されたギベ5王国の1つ、リンム王国の2代目の王アッバ・ボギボ Abba Bogibo の信仰のあり方についてつぎのように述べている。

今の王で4代目（ママ）のアッバ・ボギボ（Abba Bokibo）・・・は、ヤギの毛皮のマントの装いで木の幹に腰掛け足元に牛皮を敷き、市場で法を施行する。サカ Saka に

<sup>12</sup> デルグ政権期、北部地域から南部地域に大規模な再定住計画が実施された。その時に大勢のアムハラ農民がジンマ県に移住したので、それ以降、キリスト教徒アムハラは都市部だけでなく農村部にも住んでいる。

<sup>13</sup> 本節は、石原（2009a）第五章の一部を抜粋の上要約したものである。

は1000人ものイスラーム学者 *moolahs*<sup>14</sup>がいる。でもモスクがないので礼拝は最初の改宗者であるボフォの墓で行われている (Harris 1844 : 55)。

人口の大半がイスラーム (Mohammadanism) に改宗しているにもかかわらず、フダル Hedar 月のミカエル Michael の祭日には依然として『ワク』への供犠は行われる。聖樹 *Woda* は *Betcho* にある。女性は一切そこに近づいてはならないとされ、その聖樹の木陰で聖職者は任じられる。たとえ預言者の信者だろうと迷信的に血を供える。信者が何千人も集まると、政治的役職者 *Lubah* が群衆の上に、最初はビールを、次に生のコーヒー豆とバターを、そして最後に小麦粉とバターをごちゃ混ぜにしたものを散布する。そして白い雄牛が屠殺され、その血も散布して儀式は終了する。後はそれを食べたり飲んだり、酔っ払ったりするだけである (Harris 1844 : 56)。

ここでハリスが、リンム王国の領内において、キリスト教の祭日 (「フダル月聖ミカエルの日」(これは西暦11月21日に相当)) に、オロモの聖樹オダのもとで神 (*wak* < *Or. waqa*) への供犠が行われると指摘しているのは興味深い。すなわち、人口の大半がムスリムでありながらリンム王国においてはガダの役職者ルバが依然として儀礼的な役割を保持しており、以下のようなオロモの儀礼を続けている点である。

- (i) ベチョにある聖樹オダの木陰で供犠を行い、その血を奉げる。
- (ii) ガダの役職者ルバが儀礼首長としての役割を果たす。
- (iii) オロモの信者の上に「ビール (*farso*)」と「コーヒー豆とバター」、「小麦粉とバター」を散布する。
- (iv) 白い雄牛を屠殺し、その血を散布する。

ハリスにとって、オロモ民衆がイスラームに改宗したにもかかわらず「オロモ的」な儀礼を保持していることは珍奇なことに思われたかもしれないが、オロモ民衆にとっては、現世における豊饒性と安寧をもたらすために行われる供犠と、来世のために道徳的規律の遵守を訴えるイスラームの教えとは容易に両立し得たのではないだろうか。リンム王国の2代目王アッバ・ボギボも、神聖なアガムサ山の麓で王国の安寧と繁栄を祈願して、自ら供犠を執り行なうなど、率先してオロモの儀礼を行った<sup>15</sup>。また、リンム王国内で王自身が民衆に対して、「神をなだめる為に煎ったコーヒー豆を木の根に供え、道にビールを撒き散らすよう、命じる」こともあった<sup>16</sup>。

このようにリンム王国では、王アッバ・ボギボをはじめ一般民衆も、宗教的にはまだキリスト教の祭祀やオロモの象徴・儀礼を続けていた。だが、王の個人的性格によってそうした傾向に不満をもつ王も出てきた。たとえば、アッバ・ボギボの後を継いだアッバ・ゴモルについて、1850年代にリンムを訪れたイタリア人宣教師マサイヤはつぎのように述べている。

<sup>14</sup> ハリスは英国人なので、英領インドの慣例に従い、イスラーム学者をムッラーと言及したのであろう。

<sup>15</sup> D'Abbadie N.A.F. 21300, f. 790-91.

<sup>16</sup> D'Abbadie N.A.F. 10223, f. 59.

王がもう一人の息子だったならばよかったのに。その息子はアッバ・ディコといい、若くて高い知性の持ち主で、寛容で、それほど狂信的なイスラーム主義者ではない点において、父親 (Abba Bogibo) と性格と感性が似ており、統治においてもその足跡に続く者であったろう。だが、代わりに王位についたのはアッバ・ブルグであった。彼は無能で迷信的で狂信的なムスリムで、たちまち取り巻きにメッカ帰りの聖者 (*santoni della Mecca*) を置き、一日中彼らと過ごし、彼らから助言を得、もしかしたら統治に関する命令すら彼らから得ていると思われるのだ。・・・(アッバ・ブルグはアッバ・ゴモルに) 改名したが、行動は改めなかった。そのため初日に王が皆のものに彼らが傾倒すべきことについてお触れを出した時、冒頭にこう言ったのである。『エンナーリアの王にしてムスリムの父でありリンム族の主人、アッバ・ゴモル』と。エンナーリアの民衆は、他のガッラ<sup>17</sup>同様、ペイガンの宗教 (*la religione pagana*) に従っていたので、王が王国の中ではよそ者で不穏で嫌われている『ムスリムの父』と自称したことに失望を感じた (Massaja 1889 : 18-19)。

ギベ 5 王国のオロモの宗教に関するマサイヤの記述は、カトリック宣教師としての立場上、バイアスがかかったものとならざるを得ないことは否定できないが、この記述から、当時リンム王国では民衆がムスリムを「よそ者」とみなしていたことがうかがえる。だが、イスラームが早い時期に民衆レベルに浸透したとされるゴンマ王国でさえ、民衆の間では、オモ系の宗教信仰の残滓ではないかと思われる精霊崇拜の儀礼が行われていた。

また、早くからイスラームが民衆の間に浸透していたとされるゴンマ王国でさえ、1879年同王国 (アッバ・ボーカ王の時) を訪れたイタリア人探検家アントニオ・チェッキは、イスラームの状況について次のように述べている。

ゴンマのガッラは、イスラームを最初に受容れた。大人も子供もコーランを暗誦し、これは知識人という雰囲気漂わせる放浪ムスリムが教えていた。それでも彼らはペイガンの迷信の痕跡を根深く残していた (Cecchi 1886: 240)。

また、ゴンマには他の王国同様、イスラーム学者 (*fokera* や *Scech*) ほどの尊敬を集めないマラキ (*malaki*)<sup>18</sup>と呼ばれるペテン師 (*ciurmadori*) がおり、あらゆる病を・・・草からの抽出物や唱え事を用いて治すふりをする。以下に、P. Leon des Avanchers が語ってくれた例を示そう。

『私がゴンマを通過した時のことである。主が病気になり *tolfata* (贖罪)<sup>19</sup>を行おうと考えた。そこで主はジンマ (Gimma Caca) に、ガルバーボ *garbabo* と呼ばれる *bethel* (*Celastrus Edulis*)<sup>20</sup>を買いに奴隷を1人遣いにやった。この植物は精神に活力を与え

<sup>17</sup> ガッラ (Galla) は、オロモに対して用いられる蔑称である。

<sup>18</sup> ここでマラキ (*malaki*) という場合、それがどのような人物であるのか不明である。呪術を用いた「奇蹟」を用いるとして、比喩的に「天使 (Ar. *malā'ika*)」と呼んでいたのかもしれない。

<sup>19</sup> *Tolfata* は、オロモ語で呪術を意味する [Tilahun 1989:561]。

<sup>20</sup> ガルバーボは、オロモ語でカート (*Catha edulis*) を意味する。キンマはアフリカにはない。

ると、ガッラ（オロモの蔑称）は信じている。奴隷が戻り、家から一定の距離に近づくやいなや：平安を（*Naghe! Naghe!*）と叫び始めた。引き続き奥方が走り出てきていつもの喜びの叫び（ウルルル！）を挙げ始めた。小屋の入口に到着すると、奴隷はひざまずいてキンマ（*bethel*）の葉を主人に渡した。主人はそれに繰り返しキスをした後、妻にバターを塗ってもらい、一部を戸口のところに、一部を住居の内側の仕切りに置いた。これは精霊（*ajana* < Or. *ayana*）への供え物である。翌日、5人の老人が呼ばれてやってきた。これら老人はいわゆる友人（*uaddag*）でボラナ Borena（純粋オロモ）の様々な部族なら誰でもよいが、オロモ長老（*gilla*）なら誰でもよいがイスラーム学者（*fokera*）であってはならない。だから儀式は昔ながらの儀礼にしたがって完遂しなければならない。参加者は、頭にターバンを巻き、手にはオデッサ（*odessa*）と呼ばれる杖<sup>21</sup>をもつ。草の上に最年長者を囲んで腰掛け、家の主人は一握みのキンマの葉を手を持ち、神の加護を祈り、罪の告白をした上で、自分が病から快復するようにお祈りする。その後、手伝いの者達が主人に罰としてキンマを家の中と家に通じる道に沿ってばら撒かせる。それから最年長者は、葉の束の先端を一緒にもって、厳粛にそしてゆっくりと次のように叫んだ、『ガルバーボよ、聞き届けてくれたまえ。私たちのために邪悪な病から救いたまえ（*Garbabo, nama gura cabda notitollidocubahamo nuti olci!*）。そして、飢饉や疾病などあらゆる事柄について、更に病人の意図に応じてその願い事を述べて、天と地、神と悪魔をかなり無頓着に混同しながら祈願の言葉を述べた。それからキンマは出席者全員に配られ、人々もキンマに対して願掛けをし、願い事を述べた。その間、一人が単調な哀歌を歌い始めると、別の人が手拍子を取りはじめた。最後にコーヒーが焦がされバターで用意したものと、ビールが出され、家の主がそれを神に両手で容器を空に持ち上げて奉げた後に配った。同じ祈願の文句をマラキ全員が繰り返し述べた。『わたしは取るに足らぬ神の人です。私の祖先は神の加護を願い、呪いをかけ、病を取り除く力を受け取りました。そして私もまた神の加護を祈り、呪い、そして病を取り除くのです。さあ、Bemba よ、Sinca よ、Giccio よ、手伝いにきておくれ。』ゴンマ王国には、住民が崇拝の対象とする丘が2つある。その一つが Sinca と呼ばれ、アガロの王宮（*masera*）の近くにあり、もう一つは Ouoino<sup>22</sup>の *masera* の近くにあり、Bemba は別名「国の番人（*kella egdubia*）<sup>23</sup>」と呼ばれている。言い伝えによると、かつてこの丘の上に予言者（*ambiota*）の住いがあり、今はそこには廃屋しか残っていないが、その中には大蛇がいて、オロモが病気のときに供犠としてヤギを奉げると、その血とビールを飲むためだけに戸外に出てくるという（Cecchi 1886 : 241-242）。

現在でも、ジンマ農村部のムスリム・オロモの間では、友人隣人同士が毎週集まってカート（ここでは「キンマ」と誤解されている）を噛みながら祈祷を挙げる宗教儀礼は行われるが、これはスーフイズムで神秘道の集会をさすハドラ（*hadra*）という言葉で表現される。すなわちオロモの儀礼がイスラームの用語で表現されるようになったわけである。だが、ここでチェックが報告している儀礼は、ハドラと形態が類似しているにもかかわらず、参加している人も「ジッラ（*gilla*）なら誰でもよいがイスラーム学者（*fokera* < Ar. *fuqarā*）

<sup>21</sup> おそらく *waddeesa* (*Cordia africana*) のこと。

<sup>22</sup> *Awanno* のことか。

<sup>23</sup> *Kella eegdu biya* (国を守る検問所) のこと。

であって「はなら」ず、明らかにイスラーム的ではない精霊（「Bemba よ、Sinca よ、Giccio よ」）に呼びかけている。

このような混濁的なイスラームのあり方に反対し、より「イスラーム的」になるよう王や民衆に働きかける動きは、19世紀後半に散見されるようになる。こうした動きは、19世紀に同地域とスーダンや紅海経由でのアラブとの交易活動が活発になったことと無関係ではなく、宗教刷新を呼びかけるメッセージは、商人や宗教指導者がエージェントとなり、外のムスリム世界からやってきた。

## 2) イスラーム

ジンマ地方は、エチオピアの他のムスリム地域同様、聖者崇敬の慣行が根付いており、それはスーフイズム（イスラーム神秘主義）とともに、それまで王侯富裕層の宗教であったイスラームを民衆の間に広め、根付かせるのに貢献した。現在ジンマ県の農村には、聖者廟（qubba）があちこちにみられる。聖者廟の隣にはハドラ<sup>24</sup>小屋あるいはモスクが建てられ、祭日には周辺に住む信者の住民が集まって礼拝をしたり、祈禱をあげたりする。「聖者」は多くの場合、地域へのイスラーム普及あるいはイスラーム教育に貢献したムスリム知識人である。聖者の中には、王国の王をイスラームに改宗したなど、王国の歴史に名を残すものもいる。そのいくつかを以下に紹介しよう。

### ①ジンマ王国のイスラーム化

ジンマ王国は、1800年頃に、ディゴクランの男アッバ・マガルが建国した。その後、息子のアッバ・ジファール（1世）がイスラームに改宗した。ジンマ王国の歴史民族誌を記したH. ルイスは、王アッバ・ジファールが1830年、ゴンダール出身の「商人で宗教者である」アブドゥルハキーム Abdul Hakim という人物の手によってイスラームに改宗した、と述べている（Lewis 2001(1965): 41）。現在、アブドゥルハキームの墓廟は、旧王宮が残るジレンの山頂にあり、崇敬者は祭日に集まったり、週に何回か集まって祈禱集会を開いたりしている。

その墓廟の管理人はハダ・マチャという女性である。ハダ・マチャは、アブドゥルハキームの到来と王アッバ・ジファールの改宗の経緯についてつぎのように語ってくれた<sup>25</sup>。

### <アッバ・ジファール1世とアブドゥルハキーム>

（アブドゥルハキームとその父ハッジ・アリーは）二人とも *sirri* (Ar. *sahr*, 呪術) の力を持っていた。互いにヤギや豹・鳩に変身し競い合った。それを見て父は息子が自分より秀でていたことを認めた。・・・ある日、（まだ幼かったアブドゥルハキームは母親に）「（近所の）子供達と一緒に洗濯に行かせて」とせがんだ。（それを聞き父親は）「昼食を食べさせてから行かせなさい。この子を小さい人と思ってはならない。空腹のまま行かせてはならない」と言いつけておいたが、母親はアブドゥルハキームに昼食を食べさせずに洗濯に

<sup>24</sup> ハドラ (hadra) はアラビア語で、祈禱を目的とした宗教集会を意味する。

<sup>25</sup> インフォーマント: Hadha Macha Abba Digga (Laalo クラン)。Jiren にて。インタビューは、1993年9月20日に実施。Hadha Macha の亡き夫 Abba Mogga は、ナッガーディエのシャリフ Sharif 外婚クランに属し、アブドゥルハキームの曾孫にあたる。

ついて行かせた。洗濯から戻ると、衣服を服壺にしまっておいた。翌朝シェイク（父）が「服を着るので持ってきなさい」と言いつけると、壺の中にしまっていた衣服が灰だらけになっていた。・・・(アブドゥルハキームの仕業とわかった父親は息子と呼び寄せて)「預言者 *Ashrafi al-khalqi* が『3人の大人物がいる J で始まる地 (*Jiif Sadani*)<sup>26</sup>』を貴方に授けたので、そこに行きなさい。そこはアムハラでもない、ムスリム (*islaama*) でもない国だ」と命じた。だがアブドゥルハキームは行くのを嫌がった。アブドゥルハキームは(預言者がそのことを)自分に伝えなかったことが不満だったのである。そこで(父は息子を)修行庵 (Or. *kalawa* < Ar. *khalwa*) に入れると、アブドゥルハキームは(預言者)自身の口からそれを聞いた。(納得したアブドゥルハキームは)「どの方向に行けばいいのだろう」と迷っていると、(父は)槍を投げ、槍が赴く方向に向かって進むように命じた。その槍は現在のアブドゥルハキームの墓のある辺りに落ちた。こうして槍を追ってアブドゥルハキームがこの地にやってきた。

アブドゥルハキームはジンマの人々をイスラームに改宗させた。アブドゥルハキームは、ほかに優れたイスラーム学者を4人連れてきた。だが、当時のジンマの王アッバ・ジファール1世 *Abba Jifar gudda* には、イスラームに改宗するように、そして『アッラー以外に神はいない (*Lā ilāha illallāh*)』ということだけを勧め、それ以上教えなかった。当時、ジンマの民衆は、半分が(改宗を)拒み、半分は改宗したものの見せ掛けだけの改宗でとてもムスリムには見えなかった。そこでアブドゥルハキームはゴンダールに戻り、妻を娶って一緒にジンマに戻ってきた。

アブドゥルハキームは、最初ジンマへはアッバルティ経由で来たが、そこにはアリ・ダラール (*Ali Daraar*) という、呪力 (Ar. *karama*) を奪い取る男がいるので<sup>27</sup>、今回はその道を避けて西側のリンム王国を通過して戻ってきた。戻ってきてみるとジンマの人々はイスラームを放棄していた。だが、アブドゥルハキームが戻ると、イスラームを放棄していた人々はムスリムに戻った。

その後、アブドゥルハキームは、カファの王に呼ばれ、カファに留まるように勧められた。だがアブドゥルハキームがカファに赴いている間に、王アッバ・ジファールは、「腹が膨らむ病」に苦しんだ。そこで王は重臣 (Or. *abba qoro*) をカファに派遣しアブドゥルハキームが戻ってくるように伝言させたが、カファの王は肯じなかった。そこでアブドゥルハキームは遣いの者に、「戻ってきて欲しいならば、ここ(カファの都ボンガ)からジンマまで絨毯を敷き詰めるがよい」と王に伝えるように言った。当惑した王が再び重臣を遣いによこすと、アブドゥルハキームは「私は人にイスラームの道を教えるためにやって来たのであって、実際に絨毯をしいて欲しくて言ったのではない」と答えた。そしてアブドゥルハキームは、アッバ・ジファールに「神にく(集団礼拝用の)40人モスク (Or. *masgiida afurtama*) >を建てると誓願 (Or. Ar. *nazri*) しなさい。そうしたら病は治るでしょう」と進言した。そしてアブドゥルハキームがジンマに戻り、(王国の)入口 (Or. *kella*) を通

<sup>26</sup> ジンマは、Jの頭文字をもつ「ジンマ *Jimma*・(宮殿の置かれた地) ジレン *Jiren*・(王国の最盛期の王の名にちなんで) *Jifar*」が関連していることから、文脈に応じては「3つの J (*Jiib sedi*)」と呼ばれることがある。

<sup>27</sup> *Ali Daraar* については、チェルッリもグルマも言及している (Cerulli 1933:63-65, Guluma 1993)。

るなり、王は放尿した。こうして王の病気は治り、王国全体がイスラームに改宗した。それでも長老や有力者 (*Or. jarri ciccima*) は改宗を拒んだ。でもアブドゥルハキームは、「(長老や有力者がイスラームに改宗しなくても) 構わない」と言い、その代わりにその子供達にコーランを教え、イスラームの教えを説いた。子供達は親元に戻ると、飲酒は禁じられている (*Ar. Or. haraama*) こと、また、精霊 (*Or. atete*) 崇拝の儀礼をすることも禁じられていること、などを親にアドバイスした。そうして親たちもイスラームに改宗したのである。

このように、アッバ・ジファール 1 世は、ゴンダール出身の「ナッガーディエ (商人)」で<sup>28</sup>、病気治しなど呪力も持ち合わせている「聖者」アブドゥルハキームの勧めで、イスラームに改宗したとされている。だが、改宗の動機は、積極的なものではなく、病気の脅威のもとでなされた消極的要因によるものであった可能性があることがこの説話から読み取れる。一方、民衆へのイスラームの広がりも、アッバ・ジファールの時代にはそれほど進まなかったことが以下のイタリア人宣教師マサイヤの記述から読み取れる。

(*Abba Jifar* は) イスラームを受容れ、宮廷の宗教であると宣言し、王国に布教させ弟子を設けさせるためにムスリムの聖人 (*santoni maomettani*) を何人か呼び寄せた。そして王はこうしたペテン師 (*impostori*) を庇護することにより、この卑しむべき宗教 (*la turpe religione*) は首長や富者、宮廷の間に広まったものの、改宗によって何の利益にもならない民衆はペイガンのガッラのまま留まった (*Massaja 1889:10*)。

カトリック宣教師のマサイヤからすると、イスラームは「卑しむべき宗教」で、それを唱導するムスリムの「聖人」は「ペテン師」に値したのであろう。いずれにせよマサイヤの記述から、ジンマ王国のイスラーム化が、王アッバ・ジファール (1 世) の時代に王が招いたムスリムの「聖人」の手によって進められたが、当時はまだ上流階級にとどまり、民衆へのイスラーム普及はのちの時代まで持ち越されたことがわかる。

## ②ゲラ王国のイスラーム化

ゲラ王国の王アッバ・マガルは、イスラームに改宗した初のゲラ王であると知られている。アッバ・マガルの父アッバ・ラゴが 1848 年頃に逝去した後、その王位継承をめぐり、サヨクランの王の息子同士・従兄弟同士が対立抗争を繰り広げた。そのなかでアッバ・マガルは、王位を獲得できたらイスラームに改宗することを条件に、リンム王国の王アッバ・ボギボの支持を得て、対立に勝ち抜き、王の位についた。王となったアッバ・マガルは約束どおりイスラームに改宗し、1870 年に亡くなるまで、20 年間ゲラ王国を統治した。そしてその間、19 世紀のイスラーム学の中心地であった (エチオピア北東部) ウォッロからナ

---

<sup>28</sup> 「ナッガーディエ」はアムハラ語で商人を意味する。ギベ 5 王国にイスラームがもたらされたのが、北部経由の長距離交易に従事していた商人を介してである、とされることから、19 世紀において、在来オロモは、ムスリムを (商業に従事していなくても) 「ナッガーディエ」と呼んでいた。今日この「ナッガーディエ」は北部由来の血筋をもつクランの総称となっている (*Ishihara 2006*)。

ッガーディエ（イスラーム学者）を招聘し、民衆のイスラーム化を進めた。

エチオピア北部からシャイフ・アブドゥルハキームとジャマア・ヌグース *Jamaa Negus*<sup>29</sup>が率いるダウラ・ナッガーディエというイスラーム布教団がやってきた。この布教団は、交易活動に従事しながらイスラームの教えを広める集団で、まずリンムに入り、次に王アッバ・レーブ治世下のゴンマ王国、続いてゲラ王国にやってきたが、ゲラでは混乱が生じた。イスラーム受容の是非をめぐる対立が生じたのである。そしてついにカチョ付近のバッケ・アディにおいて、イスラーム布教団とその支持者と、儀礼首長カッル (*Or. qallu*) を崇拝しイスラーム受容を拒否するグループとの間で衝突が起きた。王アッバ・マガル自身は既にイスラームに改宗し、チャツラにある宮殿に布教団を招き入れたが、住民は反発した。その後、ジンマ王国の王アッバ・ジファール1世が、アブドゥルハキームら布教団をジンマに呼び寄せた。その後、アッバ・ジファールは、150人の男子から構成された布教団のメンバーに、ジンマの女を妻としてあてがい、さらにバッケ・アンジャの土地を彼らに与え、その土地の領主 (*Or. qoro*) とした。つまり、ゲラはイスラーム化推進の機会をジンマに先取されたのである。というのも、布教団がゲラに2年間滞在する間、誰一人、ゲラの女を妻として迎えなかったからだ<sup>30</sup>。

布教団がゲラのおロモ女性と結婚しなかった理由について、別のインフォーマントは、以下のように語った。

ダウラ・ナッガーディエは、ハラルやウォッロからやってきた商人である。アッバ・マガルの時にやって来て、王のマサラの近くに一時居を構えた。ダウラの人々はアッバ・マガルに姻戚関係を結ぶことを提案した。そこで、アッバ・マガルは家臣を集めて相談した。家臣らは、その場では曖昧な返事だけして退席し、密談した。ナッガーディエ、養蜂職人 (*Or. gaagurtuu*)、水の中を泳ぐ者 (*Or. bishaan kan dhaaku*)、鍛冶屋 (*Or. t'umt'u*)、皮なめし職人 (*Or. fugaa*)・・・、これらの人々は「不完全 (*Or. hir'uu*)」であるので、これらの人々と姻戚関係を結ぶことはよくない、として、アッバ・マガルにそのように進言した。そこでアッバ・マガルは、娘をダウラの人々に嫁として与えないことにした。その後、ダウラの人々は、ジンマに行き、そこでジンマの王侯貴族と姻戚関係を結び、イスラーム学が発達した<sup>31</sup>。

チェッキによると、王アッバ・マガル（1870年没）が人生末期に熱心なムスリムに転換

<sup>29</sup> Hussein Ahmed によると、*Jamaa Negus* は、18世紀末エチオピア北東部ウォッロ地方のハルブ *Harbu* から徒歩半日間の距離にある場所の名前で、そこには、カーディリーヤに属する急進的宗教指導者 *Shaykh Muhammad Shafi b. Asqari Muhammad* (1806-07年没) の墓廟がある (Hussein 2001: 83-89)。ここでいう *Jamaa Negus* は、人名というより、その人物の出身地を表しているのかもしれない。

<sup>30</sup> インフォーマント：Farid Abba Borr (Sayo クラン) , Gera 町、インタビューは2001年9月5日に実施。

<sup>31</sup> インフォーマント：Abba Dilbi Abba Gojjam (Tuni クラン)、インタビューは2002年9月14日に実施。

した理由の一つに、王の手元に届いた「メディナからの手紙」が関連している。1866年6月16日、アッバ・マガルの長男アッバ・ジファールが逝去した際、葬式に参列したグマ王国の王の息子アッバ・ジョービル (Abbà Giubir) がアラビア語の手紙を持参した。差出人は「メディナの預言者ムハンマドの墓廟の番人」とあった。そこにはつぎのような文面が書かれてあったという。

預言者ムハンマドの墓廟の番人シャイフ・サイド・アフマド *Scech Said Ahmed* は、全ムスリムに知らしめる。ある日、自分が預言者の墓のそばで眠らないように注意を払いながらコーランを誦んでいたところ、少しだけうたた寝をしてしまった。その時、目の前にムハンマドが出現した。

預言者はこう述べた。『アッサラーム・アライクム。私の信徒に伝えるが良い。彼らの罪が神の耳に届いており、神は、憤怒の余り、全ての人々をサルや他の動物にかえてしまうと誓ったことを。だが、私は神の前に進み出て、あなた方を憐れみくださいとお願いした。そして神は、人々を悔悛させイスラームの道に戻らせるために、この文書を発表することをお許しになった。だが、私の信徒たちに、熱心に断食に取り組むように、礼拝を時間どおり行うように、嫌悪すべき事柄をやめ、大勢の妾を抱えることを避け、酔っ払ったり他人の財を喰らったりしないように、そして貧乏人には施しをするように、と伝えなさい。私が地上にいた頃、天使ジブリエル (*Gabriele*) は私に、お前達信徒のために10回降りてくるとできると言ったものだ。そのうち9回は既に完遂された。最初回はコーランを運んできた。2回目は説明の科学をもってきた。・・・今や彼 (ジブリエル) はコーランを説明する科学を持ち去ろうとしており、10回目 (降下してくる時) にはコーランをも持ち去ってしまうつもりである。その時、信者は礼拝することをやめ、神は地球を破滅させ、最後の審判を行うのである。真のムスリムの信者はいなくなりつつある。一日に7千人が死んでも天国に入るのは300人に過ぎない。したがって信者に伝えなさい。そなたらは、信仰と断食に一生懸命うちこんだら地上で生き続けるだろう、と。』 (*Cecchi 1885: 268-269*)

この手紙が、ギベ5王国の王たちにどのように受け入れられたのかはわからないが、イスラームに改宗した後も在来オロモの風習を一部にせよ続けていた王侯貴族や民衆に対し、一層の「イスラーム化」に向けたメッセージとなった。

民衆レベルでの宗教刷新への呼びかけは、王国の支配者レベルでのイスラーム意識の高まりと呼応していた。19世紀末、グマ王国は西方の (非ムスリムの) オロモとの敵対関係が悪化し、ついにギベ5王国のうち主要4王国をイスラームの旗印の下に糾合し、ムスリム対 (非ムスリム) オロモという対立構図のもとに戦闘が繰り広げられることになったのである。

1882年、グマ王国の王アッバ・ジョービルは、王国の北西にあるガッバのペイガン (すなわちワカ神崇拝者であるオロモ) を征服しようと決意した。とくにガッバ内のハンナに軍勢を差し向けた。ハンナの領主アッバ・バラは呪術師 (*qallicca*) として知られていた。初戦はムスリム側が勝ち、アッバ・バラとアッバ・ディーマ・タンボ (レカとアロッジの長でハンナと同盟関係にあった) を打ち負かした。アッバ・ジョービルの勝利に対して、ディデーサ川からバロ川の間を支配する諸侯たちは、アッバ・バラ支援に結集し始めた。自ら

仕掛けた征服戦の展開が危うくなるとみるや、アッバ・ジョビルは同盟を呼びかけて、4王国（グマ、ジンマ、ゴンマ、リンム）の代表をゴジに招集した。これらムスリム王国は同盟に賛同し、この同盟は後に「4つのイスラーム王国（Arfa Naggādōta）」と呼ばれるようになった（Cerulli 1922: 24-25）。ハンナの戦士で一時グマに逗留した経験のあるトゥファ・ロバは「4つのイスラーム王国」同盟の例に倣い、それに対抗して、レカ・ビッロ、レカ・ホルダ、ノレ・カップ、ハンナの4首長国を合わせて「ペイガン（非イスラームの）同盟」の「4つのオロモ首長国（Arfa Oromota）」の結成に貢献する。「4つのイスラーム王国」同盟と「4つのオロモ首長国」同盟は、クンバで衝突し、前者が敗退した。そして前者は後者に対して休戦を申し出て受容られた。グマはその後他3王国に再度参戦を呼びかけたが、ジンマとリンムは拒み、ゴンマだけが承諾し援軍を送った。だが、第三戦もムスリム勢は敗退した（Cerulli 1922: 33-41）。

ここで注目したいのは、グマの呼びかけで形成された「4つのイスラーム王国」と（非ムスリムの）首長国から形成された「ペイガン同盟」としての「4つのオロモ首長国」という対立図式である。対置されているのは、「ムスリム＝商人（Naggādōta<sup>32</sup>）」と「オロモ（Oromota）」である。かつて「よそ者」であるがゆえにいわば「不完全」あるいは「二級市民」としての扱いしかされてこなかったムスリムは、1880年代には、周辺オロモ社会との差別化をはかる優越的表象に変貌したのである。こうしてイスラームが政治的イデオロギーとして利用されるようになった背景には、北方のアビシニア高地で、キリスト教徒の王侯貴族同士が帝位をめぐる抗争を激化させていたことや、西方ではマハディストたちが運動拡大をはかっていたことなどもあったことは間違いない<sup>33</sup>。

19世紀、ギベ5王国は、紅海に繋がる長距離交易ネットワークに組み込まれ、ムスリム商人の往来を通じてアビシニア高地との交流が深まった。その過程で、アビシニア高地東部のウォッロで独自に発展したイスラーム学の中心地ダウエと人的・知的交流が活発になった。

エチオピア北東部ウォッロは、歴史のなかでさまざまな文化をもつ人々が行き交い、「文化のるつぼ」の様相を呈する独特の風土を特色とする（Hussein 2001: 2）。13世紀、ウォッロはキリスト教徒アムハラが支配勢力であった。その後、16世紀前半に同地域は、イマーム・アフマド・イブラーヒーム（アフマド・グランニ）配下のムスリム勢に征服された。16世紀後半には、南方からオロモが大勢流入してきた。その後18世紀ウォッロには、規模や統治形態の点で異なる幾つかのムスリム首長国が成立した。19世紀前半にはウォッロは、ムスリム世界における刷新運動の影響を受けて、イスラーム学の中心として発達し、著名な宗教指導者やスーフィー（イスラーム神秘家）組織（タリーカ）の導師を輩出するようになった。一方、西方で18世紀にキリスト教徒王国の求心力が弱まりアムハラ・ティグレ諸侯が「群雄割拠」する政治状況が19世紀半ばのテオドロス2世（在位1855-68年）の出現により收拾に向い、キリスト教徒帝国が再興された。その過程で、ウォッロのムスリム・オロモ首長国もキリスト教王国に征服され、ムスリム首長たちは駆逐された。だが、テオ

<sup>32</sup> Naggādōta は、naggāde（アムハラ語）の複数形（オロモ語で-oota は複数形の語尾）である。

<sup>33</sup> 実際、マハディストの遣いの者がグマやジンマを訪問し、従属を迫った（Borelli 1890: 353-354）。

ドロス以上に反ムスリム政策を展開したのは、続いて帝位についたティグライのヨハンネス 4 世であった。ヨハンネス 4 世（在位 1872-89 年）は、ウォッロ人口の大半を占めていたムスリムに対してキリスト教に改宗するように公示を発令するとともに、それに逆らった地域に対しては繰り返し攻撃し住民を疲弊させた（Hussein 2001）。そのため、イスラーム学者の一部は他のムスリム地域、とりわけ長距離交易を通じて生態環境や資源の豊かさが知られるところとなった新興ムスリム国家のギベ 5 王国に移住した。

ヨハンネス 4 世の強制改宗政策は、ジンマ王国の王アッバ・ジファール 2 世（在位 1878-1932）のイスラーム学者招聘策と相呼応し、19 世紀末から 20 世紀初めにウォッロ出身のイスラーム学者がジンマにも大勢やってきた。また、ジンマ出身でイスラーム学の修業のためにウォッロに遊学に出た者も、ウォッロには定着せず、ジンマ地方に戻ってきて教育・教宣に従事した。

前者の例として、後にシェーコタ・ティツジェ *Sheekota Tijje*（ティツジェ村のイスラーム教師）と呼ばれるようになるハッジ・マフムード・アブーバクル *Hajj Mahmud Abubakir* がいる。

#### <ハッジ・マフムードの人生>

マフムード・アブーバクルはウォロの南、イファート *Ifat* のコラレ<sup>34</sup>出身のアルグッバである。マフムードは、コラレでコーランを修了しイルム（イスラーム諸学の知識）を教授される。その後イエメンに渡り、ザビードで 18 年間コーランを教える。その間、マフムードはメッカ巡礼を行い、そこでティジャーニーヤの許可（*Ar. ijāza*）を授かる。その後エチオピアの出身地イファートに戻る。当時、ジンマのアッバ・ジファールが各地からウラマーを呼び集めていた。アッバ・ジファールは、ハッジ・マフムードも招聘し、到着すると（ジンマ王都）ジレンに呼んで自分の姉妹を 1 人嫁にあてがい、土地を授けて定着させた。だが、メネリク 2 世（帝位 1889-1913 年）と対立したアッバ・ジファールは逮捕され、ジンマに住まう多くのウラマーも追放された<sup>35</sup>。そのためハッジ・マフムードは、出身地イファートに戻ろうとして首都アディス・アベバまで行ったところ、デジャズマッチ・アレマイヨがリンム行政郡（*Limmu Awraja*）の行政官に任命された<sup>36</sup>。このデジャズマッチ・アレマイヨの親戚にあたるシャイフ・ゼイヌは、ハッジ・マフムード同様アルグッバで、ハッジ・マフムードはアレマイヨにジンマから追放された件について相談に行った。当時ゴンマの首長（*Am. balabbat*）であったジッダ・クランのアッバ・ドゥラは<sup>37</sup>、イスラーム

<sup>34</sup> *Ifat* の *Qorare* は、イスラーム法学教育の拠点として古くから知られ、シャーフィイー学派の発信源であった（Hussein 2001: 67）。

<sup>35</sup> *Abdulkarim Abba Garo* によると、1899 年アッバ・ジファールは逮捕され当時メネリクが都としていたアンコバルに一時拘留された（*Abdulkarim* 1988:49）。

<sup>36</sup> リンム行政郡（リンム・ゴンマ・ゲラ行政地区を含む）の歴史について、複数の長老からの聞き取りをもとに書き残しているグラズマッチ・ペトロスの手記によると、*Däjjazmach Alämayyāhu* はゴンマ地区の 7 代目の行政官で赴任期間は 1914/15 から 4 年間とあるが、これではハッジ・マフムードの死後にあたるので赴任順位あるいは赴任期間を他の人物のそれと取り違えている可能性が高い（石原 2007）。

<sup>37</sup> ゴンマ王国は、代々アワリニ・クランが歴代王を輩出していたが、アッバ・ボカ・アッバ・ジファール（在位 1877-1882）を最後に途絶え、その後は戦士クランとして秀でてい

布教に力を入れ始めており、デジャズマツチ・アレマイヨからこの件について聞きつけると、ハッジ・マフムードをゴンマに呼び寄せた。そこでハッジ・マフムードは、ジンマを出てくるとき、2度とジンマの土地に足を踏み入れまいと心に誓っていたので、迂回してリンム方面からゴンマにやってきた。ハッジ・マフムードが、夢で自分の住処となる土地についてアッバ・ドゥラに話すと、それを横で聞いていた兄弟の一人が「それはティツジェだ」と指摘した。そこでハッジ・マフムードは、ティツジェに住むようになった。シェーコタ・ティツジェこと ハッジ・マフムードは、ズィクル (Ar. *dhikr*) を「<sup>きん</sup>金より貴重だ」と表現し内輪の者にだけティジャーニーヤの入団許可を伝授していた。内輪の者に限定していたのは、「証拠」となる書物をもっていなかったからである。その時、ハッジ・ユースフ (後にシェーコタ・チョコルサ *Sheekota Chokorsa* と命名される。チョコルサ村はゴンマ地区にあるが、当時ハッジ・ユースフはデド地区に住んでいた) とデド地区の領主アッバ・ワジ (アッバ・ジファール2世の兄弟。ティジャーニーヤの導師として知られるシェーコタ・アッバ・マチャの父) は、一緒にメッカ巡礼に行った。ハッジ・マフムードは、二人を見送る際、メッカから「素晴らしいもの」を持ち帰るように依頼する。一年後、戻ってきた二人は、ハッジ・マフムードを訪ねた。二人のうち、ハッジ・ユースフがおずおずと『不可視の宝玉 (*Jawāhir al-Ma'ānī*)』(ティジャーニーヤ始祖アフマド・アッティジャーニーの功績を記した書物) を差し出した。これに対してハッジ・マフムードは「証拠の書物」を入手したとして大層喜んだ。でも、一緒にいたのにそのことを自分に黙っていたことに腹を立てたアッバ・ワジは、ティジャーニーヤを受容れなかった。ハッジ・マフムードは、ティツジェ村にて1911/12年に逝去した<sup>38</sup>。

こうしてハッジ・マフムードは、イスラーム学者を領内に集め、民衆へのイスラーム教育を奨励していたギベ5王国の諸王らに招かれて定着した。当時イスラーム学者の間ではいずれかのスーフィー教団に所属しているのが通例で、既に当該地域でもカーディリーヤに属するムスリムはかなりの数いたようである。そこにハッジ・マフムードがはじめてティジャーニーヤを導入した。当時、ティジャーニーヤは、エチオピアではあまり知られておらず、そのためハッジ・マフムードは、ティジャーニーヤを一部の人々に限定的に紹介したに過ぎない。

ジンマ地方にティジャーニーヤを広く普及させたのは、ハッジ・ユースフと西アフリカ出身のアルファキー・アフマド・ウマルである (Trimingham 1952; Ishihara 1997; 石原 2009a)。ハッジ・ユースフは、地元の人々からは「シェーコタ・チョコルサ」の尊称で記憶されており、後にアルファキー・アフマド・ウマルの熱烈な崇敬者となる。

#### <ハッジ・ユースフの功績>

---

たジッダ・クランが台頭した。だが、エチオピア帝国に編入される過程で、ゴンマ王国の王アッバ・ドゥラ・アッバ・ケレツペ (ジッダ・クラン) は、ゴンマ王国の領民がエチオピア帝国への従属に反対してジハードを訴えたのに対して、ジンマ王国同様、従属することを主張したため、民心は離れた (石原 2007)。

<sup>38</sup> インフォーマント: Abba Oli Abba Nura *Hajj* Mauhmud (*Hajj* Mahmud の孫)、Argubba クラン、ジンマ市 Alfa Bar にて、インタビューは1994年9月3日に実施。

*Hajj* Yūsuf Khalifa Nūraddīn Alī は、曾祖父 Alī がティグライ Tigray のマッサワ（現在はエリトリア領）出身で、曾祖父は兄弟と共にリンム王国にやってきた。ユースフは、ヒジュラ暦 1295（1878）年ラマダン月 25 日にグマで生れた。幼少よりジンマ・グマを報復しながらコーラン、法学（Ar. *fiqh*）、文法学（Ar. *hawwi*）を修得した。その後、ウオロのダウエに向い、ヒジュラ暦 1319（1901/02）年、ダンナのシャイフ・アフマド *Shaykh Ahmad ibn Adam ad-Danniy* からカーディリーヤのイジャーザを授かる。シャイフ・アフマドのもとで年上のシェーコタ・グマ（「グマのシェーコタ」という尊称で呼ばれるようになる *Hajj Adam* のこと）とイスラーム諸学を学んでいたが、ヒジュラ暦 1324（1906/07）年、一緒にメッカに巡礼に行く。メッカで、シャイフ・マフムード *Shaykh Mahmūd ilma Nūraddā'im ilma Ahmad at-Taibī* からサンマーニーヤのイジャーザを受け取る。シャイフ・マフムードは、スーダンで（サンマーニーヤの始祖である）シャイフ・ムハンマド *Shaykh Muhammad Abdulkarīm as-Sammānī*（1718-1775）の後継者（Ar. *khalīfā*）であった。エチオピアに戻ったハッジ・ユースフは、ジンマに戻り、そこでヒジュラ暦 1329（1911）年、スーダンからやってきたサイイド・フセイン *Sayyid Husayn Abdulwahid Ahmad at-Tayyib*（*Sheekota Garbi*）と出会い、タリーカを更新した。サイイド・フセインは、ハッジ・ユースフはじめ大勢の人々を観想修行（Ar. *khalwa*）に導いた。その後、ヒジュラ暦 1332（1913/14）年、ハッジ・ユースフは二度目のメッカ巡礼を行った。当時、ハッジ・ユースフはデドに住んでおり（先述）、友人のアッバ・ワジ・アッバ・ゴモル *Abba Waji Abba Gomol*（1937/38 没）と二人でメッカ巡礼を行った。二人は、まずカイロに寄ってイマーム・アッシャーフィイー *Imām ash-Shafī'ī*<sup>39</sup>の墓廟（Ar. *qubba*）とハルワティーヤ<sup>40</sup>の聖者（Ar. *walī*）であったサイイド・ムハンマド・バクリー *Sayyid Muhammad Bakrī*の墓廟を参詣（Ar. *ziyāra*）した。この聖者は（ティジャーニーヤで重視されている）サラート・アルファーティという祈禱句を始めた人である。カイロからシリアに行き、そこでも三つのモスクを訪れ、その後イェルサレムを通り、ベイルートに抜けようとしたが、レバノン入国を禁じられ、サウジアラビアのヤンバエを周り、ラマダンに間に合うようにメディナに向った。メディナでラマダンを行った。そこでモロッコ人（Fāsī）のサイイド・シャリフ *Sayyid Sharif Abdulqadir* からティジャーニーヤの許可を授かった。その時、アリー・アルハラーズィム著の『不可視の宝玉 *Jawahir al-Ma'ani*』を受け取った（先述）。このサイイド・シャリフ *Sayyid Sharif Abdulqadir* は、ムハンマド・ガンヌーンから、ムハンマドはアラビ・サイイフからそしてアラビはアリー・アッタマーニスィから、アリー・アッタマーニスィは、アフマド・アッティジャーニー（ティジャーニーヤの始祖）から許可を授かった。

帰国後、ハッジ・ユースフはデド地区で多くの人々にティジャーニーのイジャーザを授けた。その後ヒジュラ暦 1346（1927/28）年、ハッジ・ユースフは三度目のメッカ巡礼を、今度は息子のアッバ・タマムと共に行った。メディナでは、4つの法学派（Ar. *madhhab*）の学者（Ar. *'ālim*）であるサイイド・ムハンマド *Sayyid Muhammad al-Futi Alfa-Hashim*（Volta 出身）に出会い、ティジャーニーヤの教えを強化した。メッカではモロッコ人（Fāsī）

<sup>39</sup> シャーフィイー学派の祖。

<sup>40</sup> サンマーニー教団はハルワティー教団から分枝した教団。

のティジャーニーの学者であるウスマーン・アラミンと出会う。帰国後、ハッジ・ユースフは、ヒジュラ暦 1347 (1929) 年のラマダンをチョコルサで行い、翌 1348 (1929/30) 年、ゴンマのダールに移住し、そこを拠点にティジャーニーヤを広めた。当時、ジンマとゴンマでティジャーニーヤを広めていたのはハッジ・ユースフであった。

その後、ハッジ・ユースフは、デンビドロ (ミンコ) のアルファキー・アフマド・ウマルの噂を耳にして、ヒジュラ暦 1354 年ムハッラム月 (1935 年 4 月)、ミンコに赴き、アルファキーのもとで 6 ヶ月間、観想修行を行った。その後ゴンマに戻ったハッジ・ユースフは、押し寄せる訪問客を避けるようにして当時まだ未開拓地であったサディに家族とともに移り住み、そこでひっそりと信仰 (Ar. *ibāda*) 生活を送った。その後サディで病気になったハッジ・ユースフは、ダールに戻り、ヒジュラ暦 1356 (1937/38) 年、61 歳で逝去した。ハッジ・ユースフは、二人の息子、アッバ・タマム (*Hajj Muhammad*) とアッバ・ジャマル (*Hajj Ahmad*) をそれぞれサカのウシャネとチョコルサに住まわせ、ティジャーニーヤの普及にあたらせた。二人とも父の後に、アルファキー・アフマド・ウマルのもとを訪れており、アッバ・ジャマルは、ヒジュラ暦 1370 (1950/51) 年にアルファキー・アフマド・ウマルの功績を讃えて *Kashf al-Hazan* を著した<sup>41</sup>。

シェーコタ・ティツジェがティジャーニーヤをギベ 5 王国に伝えたとするならば、ハッジ・ユースフはその普及に貢献した。ハッジ・ユースフの同教団普及に貢献した程度は大きく、すでに 1927~28 年にイタリア人チェルリがジンマ地方を訪れた時、ティジャーニーヤはカーディリーヤと並んでジンマで主要なスーフィー教団となっていた (Cerulli 1933: 96)。このようにイタリア統治期以前におけるジンマ地方の宗教活動は、スーフィー教団全盛期であったといえる。そしてスーフィー教団がムスリムの中心的な信仰活動となる状況は、帝政崩壊時 (1974 年) まで続く事になる。

17 年間続いたデルグ政権 (1974-91) の宗教全般への影響について、ジンマ地方の人々はしばしば「信仰心 (Ar. *niya*) が減った」と表現する。当初エチオピアのムスリムは、キリスト教徒を優先する帝政の崩壊を歓迎したが、次第にデルグ政権が強権的体制と社会主義政権特有の無神論の立場を前面に押し出すようになると、宗教関係者の同政権に対して寄せていた期待は失望へと変わっていった。1976 年に食品の国内市場価格が急騰すると、(ムスリムが大半を占めていた) 商人は「農民を搾取する敵」として攻撃の対象となり、大勢の商人が逮捕・処刑された (Hussein 1994:786-787)。また 1979 年には、新聞紙上でイスラームの祭日が取上げられることがなくなり、ムスリムの結社は禁止され、宗教施設は、政府からますます攻撃的となった (Eide 2000:114)。一方、1977~78 年には全国で「エチオピア人民革命党 (EPRP)」、「全エチオピア社会主義運動 (AESM)」のメンバーが「粛清」の対象となり、大勢の人々が逮捕・拷問・処刑された。また、全国で布教活動を展開していた福音派教会のミッションは、1979 年以降、当局からの活動規制を宣告され、取り締まりと迫害が厳しくなるにつれ、規模縮小を余儀なくされた (Eide 2000: 162-174)。

デルグ政権期の宗教政策の特徴としては、まず第一に、帝政下で特権的な位置づけにあ

<sup>41</sup> インフォーマント : Abba Jihad *Hajj Yusuf*, Jimate Daru にて、インタビューは 1994 年 9 月 7 日に実施。

ったエチオピア正教会の権威の失墜 (Haile Mariam 1986)、第二に、欧米諸国からの人的・財政的支援で活動を展開していた福音派教会がミッションの国外追放により活動を著しく制限されたこと (Eide 2000)、そして第三に、イスラームに関しては、帝政時代に認められなかったいくつかの権利 (ムスリム祭日を国民休日とする、イスラーム最高評議会の設立など) が認可された点があげられる (Østebø 2012:198)。デルグ政権は、世俗主義の立場を貫きながらも、全般的に宗教を重視する国民の気質に配慮して、教会やモスク・聖者廟を破壊したり、巡礼や参詣を妨害したりすることはなかった。だが、ムスリム農民たちはマルクス・レーニン主義のレトリックを教え込まれ、宗教は周縁化された (Østebø 2012:202)。

1979年9月中旬、ティジャーニー導師として多くの信奉者をもつアルファキー・アフマド・ウマルの長男サイイド・ムハンマドハサンの息子たち、サイイド・マアウィヤ、サイイド・マフムード、サイイド・ヤースィンの3人が大勢の付添い人とともに警察に連行された。サイイド・マアウィヤ (当時35歳) はケイラーティ村の自宅から付添い人10人とともに、サイイド・マフムードはクダ村の第二妻宅 (Or. *gafō*) から付添い人5人とともに、そしてサイイド・ヤースィンはカルサ郡のマブルーカ村の自宅から付添い人6人とともに連行された。

この3人が逮捕された理由は、3人がアルファキー・アフマド・ウマルの長男の息子として大勢の人々から崇敬の対象とされていたことによる。3人とも、アフマド・ウマルの孫であるゆえに、その「カラーマ (奇蹟を起こす力)」を引き継ぐものとして、大規模なハドラ集会を開いたり、盛大なマウリド祭を開催したりしていた。だが、当局はこうした宗教活動は「人心を惑わす」行為として警戒し、しかも宗教目的の集会が常に政治目的の集会に転じる危険性があるとする危惧から、ムスリムに限らずキリスト教徒社会において大勢の崇敬者を惹きつける力をもつカリスマ的人物は逮捕・拘留ひいては処刑されるという憂き目にあっていた。デルグ政権期における、この3人を含む多くの宗教指導者や「聖者」の処刑ないし「失踪」事件は、「聖者崇敬」そのものに対する挑戦となった。「聖者」は「脱神秘化」され、一介の世俗的な生身の人間として立ち現われたのである。

それまで週に何度か隣人の家や共同体のザーウィヤ (修道所) に集まって、カートを噛みながらコーヒーを啜りながら祈禱を挙げ、マンズマ (Ar. *manzuma*, 宗教的詩歌) を唱えるハドラ集会を開いていた人々は、それを放棄し、村の子供たちにコーランを教えていた人々もコーラン学校を閉鎖し、それまで聖者廟への参詣に毎年欠かさず通っていた人々もそれを控えるようになった。人々の「信仰心が減った」というのは、このような宗教への全般的関心の低下を意味した。そして、ジンマ地方のムスリム・オロモ社会における宗教生活は、「聖者」に対する崇敬がその根幹に据えたものであったために、「信仰心の減退」は必然的に「聖者崇敬」あるいはスーフイズムの減退を意味したのである。

帝政期・デルグ政権期通じて民衆の間に限定的な影響しかなかったイスラーム復興主義は、デルグ政権崩壊後の宗教復興の気運の中でその影響力を拡大した。デルグ政権期が間接的にもたらした「信仰心の減退」という間隙に、イスラーム復興主義が忍び込んだのである。

デルグ政権期に規制されていたメッカ巡礼をはじめとする国外渡航が、デルグ政権崩壊後に自由化されると、イスラーム世界で拡大していた思想潮流がエチオピアにも伝えられ

るようになった。海外のイスラーム諸国から帰国したムスリムのなかには、エチオピアのムスリム諸社会で根強く支持されているスーフィズムや聖者崇拝に反対し、こうした活動に参加する人々を非難するだけでなく暴力をもって妨害する人々がいる。これらの人々は、一般に「ワハビーヤ (Wahabiya < Ar. Wahhābī) 」と呼ばれ、「聖者崇敬」を支持する「アハル・アッスンナ (Ar. *ahl as-sunna*) 」<sup>42</sup>あるいは「スーフィーヤ (Ar. *sūfiya*) 」と対置されるようになる。

「ワハビーヤ」は、聖者崇拝だけでなく、預言者崇拝に通ずるとして預言者聖誕祭 (Mawlid an-Nabī) の開催にも反対し、日々の礼拝の仕方まで「アハル・アッスンナ」の人々と異なる。日々の礼拝に関しては、「アハル・アッスンナ」が信仰義務 (Ar. *ibāda*) となっている礼拝の前後に「スンナ (預言者の範例)」として一定回数のラクア (Ar. *rak'a*) だけ余分に礼拝を行い、礼拝終了後には揃って祈禱を挙げることを慣例としているのに対して、「ワハビーヤ」はイバーダの礼拝だけ個々人で済ませて早々にモスクから退出する。このような礼拝方法の相違のため、金曜礼拝モスクではモスクを先導するイマームの人事や礼拝の仕方をめぐり対立が生じ、それが嵩じて暴力を伴った騒動にまで発展したことがある。その結果、「ワハビーヤ」が別のモスクを建設することも多い。1995年以降、サウジやクウェートなどアラブ湾岸諸国からの資金援助を得たとされる「ワハビーヤのモスク」が全国各地で建設されるようになる。

ところで、聖者崇敬を支持する「アハル・アッスンナ」の側から「ワハビーヤ」とレッテルを貼られた人々は一枚岩の集団を構成してはおらず、その主張を裏付ける教育施設や組織があるわけでもない。ただ緩やかな個人的ネットワークで交流し合い、その教えを共有し合っているようである。たとえば、ジンマ地方で名の知れたムフティー (Ar. *muftī*)<sup>43</sup>が一人いる。このムフティーを「ワハビーヤ」と呼ぶ人は少ないが、このムフティーの弟子はしばしば「ワハビーヤ」と呼ばれる。

#### <ムフティー、シャイフ・ムハンマド・アリーの経歴>

ムハンマド・アリーは、1930年前後、エチオピア東部の町アッサブ・タファリで生れた。エチオピア北東部ウォッロ地方のイスラーム学中心地ダウエでハッジ・カビール (アズハル大卒のムフティー) のもとで学ぶ。25歳になって、ムハンマド・アリーはアスマラ経由でハルツームへ向った。ところがその後陸路でエジプトに行こうとしたところ、パスポート不所持の不法滞在で警察当局に拘束されアスマラに送還され、そこで5ヶ月間拘留された。出獄後、スーダン経由でパレスチナに向い、そこからシリアのダマスカスに行き、そこで4年間ムーサ・ラクーディなる人物の家で世話になる。そこでシリアのパスポートを取得してエジプトに渡り、アズハルで8年間学びシャリーアで学位をとった。学位取得後、空路でハルツームへ戻り。さらにそこからロバでエチオピア西部に入国し、アソサ、ベギ、デンビドロ、チョラ・クンバベにそれぞれ1ヶ月ずつ滞在しながら移動し、ついにジンマ地方に到着した。ジンマ地方ではアガロ南東部のバッコのハッジ・ハサンのもとに滞在した。その後、近くのイルブ・テラミでハラル出身の旧友に出会い、その住民が「ムフテ

<sup>42</sup> バレ地方では、「アハル・アッスンナ」は、イスラーム復興主義者が自称としている (Østebø 2012)。

<sup>43</sup> ムフティーとは、ファトワー (法学裁定) を出す法学者。

イー」を気に入ってそこに住み着くように進めたので、そこで妻を娶った。その後、ボトのハッジ・アッバ・コイヤスのもとに滞在したが、「自分は森の中の方がよい」といって、付近のバタラ村に居を構え、そこで40年間、個人的にイスラーム諸学を弟子に教育しながら住み、1999年に逝去した<sup>44</sup>。

このムフティーの弟子は、ジンマ地方各地に分散して宗教指導にあたっている。ゴンマ郡の中心地アガロ町の金曜礼拝用モスクは、1992～93年頃、「ワハビーヤ」と「アハル・アッスンナ」の対立が発生し、その結果、前者は自分達のモスクとして「カバレ<sup>45</sup>06のモスク」を建てたとされるが、そのイマームを務めるシャイフ・ザーキルもムフティーの弟子であった。また、後述する「バシャシャ事件」の首謀者となる、バシャシャ町のモスクのイマーム、シャイフ・ムハンマド・アッバ・ズナブもまたムフティーのもとで学んだ経歴がある（第三節参照）。

ところで、ジンマ地方のムスリムの間で「ワハビーヤ」は外見でわかるとされている。「アハル・アッスンナ」の人々によると、「ワハビーヤ」は人相が悪く、その態度が「乾燥している (Or. *goggaa*)」という。「乾燥している」態度とは、相手との対話のなかでひたすら自らの主張を頑固に繰り返し、相手の意見に耳を貸さない態度をさすが、これはオロモが価値を置く豊饒性や多産性とは反対の価値を表す。その他、「ワハビーヤ」を見分ける最も顕著な徴が、顎鬚 (Or. *hareeda*) である。男性の「顎鬚」と女性の「ヴェール」が、イスラーム復興主義者を見分ける表徴であることは、他地域でも報告されている (大塚 1989)。大塚によると、エジプトでは1970年代になって「新たに発明された伝統」として「あご髭とガラビーヤ (白い長衣)」が、男性のイスラーム原理主義者の表徴となり、それは世俗的高学歴層の間で広まったと述べている (大塚 1989: 274)。エチオピアの場合、世俗的高学歴層がイスラーム復興主義に傾倒することは稀である。一般化は難しいが、エチオピアにおいてイスラーム復興主義に染まる人々は、商売に成功して金銭的に余裕が出た青壮年がメッカ巡礼を行い、そこで感化されて帰国した者 (Østebø 2012: 132) か、あるいは最低限の世俗教育しか受けておらず、若い頃からイスラーム復興主義に傾倒しているイスラーム教師のもとで働きながら学習した者<sup>46</sup>か、単に隣人友人の影響を受けた者、のいずれかである。

ジンマ県において、そうしたイスラーム復興主義者たちは、単に特異な衣裳でアイデンティティを主張するだけでなく<sup>47</sup>、自分たちの主義主張に従わないムスリムを批判したり、

<sup>44</sup> インフォーマント：息子アブドゥラティーフ・ムハンマドアリー。インタビューは2003年8月10日ボト町アッバ・サディ宅で行った。

<sup>45</sup> カバレとは、デルグ政権期に導入された住民自治組織で、行政の末端機関となっている。

<sup>46</sup> エチオピアでは、このような制度を「カリーヤ (*qariya*)」と呼ぶ (cf. Hussein 1988)。農村部にイスラーム教師が住んでいる場合、周辺農家に下宿させてもらう。農家としては、イスラーム教育を受ける学生を無料で下宿させてあげることが、寄進行為という意識がある一方、学生としては食事と宿を提供してくれる農家への謝礼として繁忙期には空き時間に農作業を手伝うなどして奉仕する。

<sup>47</sup> ジンマ県では、男性は顎鬚、女性はジルバーブ (顔だけ出せる円形の長衣) とニカーブ (目以外の顔を隠す布) が、イスラーム復興主義者のアイデンティティを表徴する服装となっている。

その宗教行動を妨害したりした。そうして、「ワハビーヤ」とは対立する立場として「スーフィーヤ」あるいは「アハル・アッスンナ（スンナ<sup>48</sup>に遵う人々）」という立場が出現した。「ワハビーヤ」と「スーフィーヤ」の対立構図は、金曜礼拝用のモスクの主導権やマドラサでの教育方針をめぐる先鋭化し、時には暴力沙汰に発展することもあった。ムスリム社会内部での対立は、イスラーム復興主義者の多くがサウジアラビアなどアラブ諸国に資金源があることも手伝って、独自のモスクやマドラサの建設という形で解決が図られた。だが、「ワハビーヤ」の「スーフィーヤ」に対する攻撃は、聖者廟参詣への妨害や、聖者廟の破壊、さらにはマウリド（預言者ムハンマド生誕を祝う行事）やオロモ的儀礼風習（「コーヒー豆の供犠（buna qala）」や結婚・出産にまつわる慣習（shanani）等）の否定という仕方でも発現された。「スーフィーヤ」は、狭い意味でのタリーカに属する人々とどまらず、オロモ文化と融和的關係を築き上げてきた従来のイスラームのあり方に遵う人々全般をさす呼称となったのである。

また「従来のイスラームのあり方」は、長年かけて築き上げてきたキリスト教徒との平和的共存関係をも含むものとなった。ジンマ県において「ワハビーヤ」は、「スーフィーヤ」と対立するだけでなく、「スーフィーヤ」と平和的関係を築き上げてきたキリスト教徒をも攻撃対象とするようになったのは、こうした経緯によるものである。

### 3) キリスト教

ジンマ県がエチオピア帝国に編入されると、キリスト教徒アムハラが、行政官・兵士だけでなく教員・公務員として移住してくるようになる。その多くが家族や従者ととも町（ケテマ）に住み、富裕な者や行政官は寄進して教会を建設した。たとえば、初期のものとして1920年代にゴンマ郡に建設されたコタ・ミカエル教会がある。

#### 【コタ・ミカエル (Qota Mikael) 教会の場合】

アガロ市から西方約10キロにあるコタ町は、アガロに行政の中心が置かれる前にゴンマ郡の役所が置かれた町である。この町の唯一の教会である聖ミカエル教会は、ラス・DESTA (Ras Desta Damtew) (1937年没) がゴンマ郡の行政長官をつとめていた1920年代に建設された<sup>49</sup>。教会は町の東側、東西に町を横切る道の北側の小高い丘の頂上にある。当時子宝に恵まれなかったラス・DESTAが、妊娠中の妻<sup>50</sup>に陣痛が起きた時、無事に子が生まれ

<sup>48</sup> 「スンナ」とは、預言者ムハンマドの言行を意味する。預言者の言行は、種々の「ハディース（伝承集）」にまとめられ、イスラーム世界ではクルアーンとともにイスラーム法の法源の一つとなっている。

<sup>49</sup> ラス・DESTA・ダムトウ (1893-1937) の父フィタウラリ・ダムトウはショワの上流貴族で皇帝メネリク2世がロシアに派遣した公式訪問団の団長をつとめた人物である。父ダムトウが（イタリアと対戦し勝利した）アドワの戦いで戦死した後、息子DESTAは宮廷で養育された。後に皇帝となるハイレセラシエ1世（在位1930-74）の長女テネンニウォルク（2003年没）と結婚し、1928年にエチオピア南部スィダモの行政長官として赴任するまで7年間ゴンマ郡の行政長官をつとめた（石原 2007; Bahru 2005）。ラス・DESTAは、欧米訪問の経験から近代化推進主義者で、赴任地において道路の建設や教育の普及、科学医療や浄水施設の普及に尽力した（Prouty & Rosenfeld 1981: 49）。

<sup>50</sup> ラス・DESTAの妻は、最後の皇帝ハイレセラシエ1世（在位1930-1974）の娘テネンニ・ウォルク（1912-2003）である。

たらコタに聖ミカエル教会を建てると誓願 (silet) をし、その願いが叶ったのでミカエル教会を建てたといわれている。(エチオピア中部) ショワ地方のインサロ (アムハラ州北ショワ県 Ensarro 郡) の司祭ウォルデ・メドヒンなる人物が (聖ミカエルの) タボット (聖櫃)<sup>51</sup>を持ってきた<sup>52</sup>。

現在ジンマ県には、合計 169 軒ものエチオピア正教会系の教会があるとされる<sup>53</sup>。この数値は、信徒約 200 万人いるとされる首都アジスアベバにわずか 150 軒しかエチオピア正教会がないことを考えると、多いと言わざるを得ない<sup>54</sup>。だが、教会はあくまで近辺に住んでいるキリスト教徒が自分たちのために建設・維持しており、ムスリムをキリスト教へ改宗させようと布教活動を実施しているわけでもないし、教会はその存在によってムスリムが改宗すると期待して建設されたわけでもない。現地に住むムスリム・オロモにとって、教会 (アムハラ語では *bete kristian*、オロモ語では *betaskana*) はあくまで北部出身の征服者あるいは移住者のものであった。

もっとも、デルグ崩壊以降、都市部の若者中心に、福音派諸教会 (現地では「ペンテコスタル」の略「ペンテ」と呼ばれている) が広がっており、ジンマ県では他地域から移住してきたオロモが中心の担い手となっている<sup>55</sup>。正教会系の教会が、特定の地理的特徴をもつ敷地 (高台・門構えがあり、塀で囲まれている) に建てられているのに対して、福音派の教会 (英語の *church* から、*charch* と呼ばれる) は場所を選ばず、住宅街の片隅にも設立される。

### 3. バシャシャ事件

ゴンマ郡の中心地アガロから南西にゲラ郡に向かう未舗装道路を約 20 キロ行ったところにバシャシャ町がある<sup>56</sup>。バシャシャ町はゲラ郡中心地チラ町までの 45 キロの道のほぼ中間地点にあり、毎週月曜日には大きな定期市がたち、周辺の農村部から大勢の農民、そし

---

<sup>51</sup> エチオピア正教会の教会には、イスラエルから初代皇帝メネリク 1 世が持ち帰ったとされる聖櫃 (タボット) のレプリカが至聖所に収められているべきとされている。

<sup>52</sup> インフォーマント: ベライ・ベイェネ氏 (コタ・ミカエル教会学校教師、60 歳)、2002/8/28 実施インタビューより。

<sup>53</sup> ジンマ県内のモスク・教会など宗教施設に関する悉皆調査は実施されていないので、正確な数字は不明である。教会の数 169 という数値は Feiruz Surur & Mirgissa Kaba (2000) による。それによると、2000 年の段階でジンマ県にはモスクが 240 以上、エチオピア正教会が 169、プロテスタント諸派の教会が 12 あるとしている (Feiruz Surur & Mirgissa Kaba 2000: 62)。ただ、この数の情報源が記されておらず、モスクの数え方は、聖者廟敷設の祈祷小屋や個人宅敷設の礼拝所を含めるか否か、などの数え方の基準が記されていないので、正確な数値は不明である。またプロテスタント諸派の教会に関しても、2011 年ジンマ県アサンダボ郡内で起きた (プロテスタント諸派) 教会連続焼き払い事件で、被害にあった教会は 60 近くあったとされるので、この数値も基準に疑わしいところがある。

<sup>54</sup> 2007 年統計によると、アジスアベバ人口 (2,739,551 人) の 74.7% がエチオピア正教会信徒である。ジンマ県のエチオピア正教会信徒は 277,917 人 (県人口の 11.2%) である (CSA 2007)。

<sup>55</sup> ただジンマ県の人口に占めるプロテスタントの割合 (2.97%) は少ない (CSA 2007)。

<sup>56</sup> 2007 年統計によると、バシャシャ町の人口は、4,971 人 (1,035 世帯) とある。

て都市部からは商人が集まって賑わう。筆者も1992年にゴンマ郡で調査を始めた当初、バシャシャ町から徒歩1時間ほどのボト町に滞在していたため、バシャシャには頻りに立ち寄ったことがある。この町で2006年10月にムスリムが教会を襲撃する事件が発生した。この事件は、警察当局が迅速な対応を怠ったことから、政府による陰謀説が流れ<sup>57</sup>、加えてその凄惨な殺害の状況や証言がYou Tubeで流れたことから、人々の記憶に残るものとなった。むしろこの事件は、突発的に起きたものではなく、発生前に伏線となる小さな衝突が繰り返されていた。筆者は、事件発生から9年たった2015年8月にバシャシャを訪れ、事件の経緯や背景について住民から聞き取りを行った。以下は、キリスト教徒(①)<sup>58</sup>とムスリム(穏健派)(②)<sup>59</sup>から得た証言の要約である。

### 【バシャシャ事件の経緯】

①バシャシャ町は、ゴンマ郡の他の町同様、ムスリム多数派でキリスト教徒が少数派の町である<sup>60</sup>。この町には長らく教会がなく、バシャシャに住むキリスト教徒は近隣のアガロ市などに通っていた。そこでバシャシャ町のキリスト教徒らが出資して町の東端の丘に1992/93年に聖ゲブレメンフェス・クッドゥス(通称アウエ)教会を建てた。タボット(聖櫃)は、ゲラの聖マリアム教会から譲り受けた。建設には、3人のキリスト教徒(ブルハヌ氏、アベベ・ベケレ氏、アッポイエ氏)が中心的役割を演じた。土地は自治体(カバレ)から譲り受けたもので、それ以前は未使用地であった。だが、教会用地に隣接する土地を所有するムスリム・オロモ住民が少しずつ境界線を越えてユーカリ林を植えるなどして教会の土地を侵食し始めた。そこでキリスト教徒たちは、2002/03年にムスリム隣接住民を告訴し、2005年にキリスト教徒側に有利な判決が下された。だが、ムスリム側は撤去命令に応じず、事態は膠着状態に陥っていた。それどころか、その頃から、バシャシャ市内で、ムスリム住民がキリスト教徒住民を排斥する動きが生まれ、2005/06年にひどくなった。

2006年10月15日(日)はアウエの祭日である。その前夜、バシャシャのみならずアガロなど周辺の町からキリスト教徒およそ100人が礼拝や翌日の祭の食事の準備のために集まっていた。真夜中を回った00:15ころ、総勢700~1000人のムスリムが鉦や犁をもってやってきた。殺害されたのは6人であった。そのうち2人は司祭(バシャシャのアウエ教会の司祭とアガロの教会の司祭)で、4人は一般市民である。その4人のうち2人は女性である。ムスリム暴徒たちは、教会を鉦や犁で壊し、屋根の金属屋根材(qorqorro)を剥がし、キリスト教徒たちを捕らえて膝まづかせてイスラームへの改宗を迫った。拒絶したものは首を切った。殺された男性の一人は(同教会建設発起人の一人)アッポイエ氏である。教会建設発起人の一人であったブルハヌ氏も殺害されそうになった。7箇所も鉦で切りつけられたが、服の上からであったので、深手を負わずに逃れた。教会の敷地周辺に植えられた

<sup>57</sup> EPRDFが主導する政権は、自らの政権運営の危うさに対する非難をかわすために、国内各地の対立抗争を沈静化させるどころか裏で手を引いて助長していると陰口をたたかれることがある。

<sup>58</sup> 2015年8月12日、バシャシャの聖アウエ教会を訪ねた。教会の設立メンバーの一人で同事件の時、辛くも殺害を逃れたブルハヌ氏から話を聞くことができた。

<sup>59</sup> 2015年8月15日、ジンマ市内で、バシャシャの副代表シャイフ・アブドゥルカーディル・アッバ・ガロ(52歳・Ennannoクラン)とインタビューを実施した。

<sup>60</sup> 国勢調査(2007年)では、バシャシャ人口は4,971人(1,035世帯)となっている。

刺のある生垣を突っ切って逃れようとしたら、服が刺に引っかかってしまった。もう捕まると思った瞬間、教会敷地内に停められていた車に火が放たれ、そのタイヤが爆発した。暴徒はその音をブルハヌ氏の発砲と取り違えて逃げたので、ブルハヌ氏は助かった。

②事件の首謀者は、バシャシャのモスクのイマーム（礼拝先導者）であったシャイフ・ムハンマド・アッバ・ズナブ（当時 40 歳代・Ennoqillo クラン）である<sup>61</sup>。ムハンマドは「ムフティー」のもとでイスラーム学（ilm）を学んだ。その父アッバ・ズナブもまたムフティーをこよなく敬愛する人物で、毎日のようにムフティーのもとに足を運んだという。結婚直後 5 日間ムフティーのもとを訪れなかったため、赦しを乞いに行くと、逆に祝福されたという。祝福を受けて 1 年後にムハンマドが生まれた。ムハンマドは、幼少の頃からムフティーのもとでイスラームについて手ほどきを受け、ムフティーから高度なイスラーム的知識を授かった。1983～85 年頃、土地の相続問題をめぐって父アッバ・ズナブと対立し、自らの父を告訴した。ムフティーはムハンマドを止めようとしたが聞かず、そのことでムハンマドを呪ったとされる。その後、ジンマ県南西部のサカ町やエチオピア東部のハラルゲ地方のムスリム知識人シャイフ・ムハンマドサーリフのもとで学を積んだ。1999 年にムフティー死去後、バシャシャでイスラーム学を教える人物として、ムフティーの弟子であったということからムハンマドの名前があがり、サカから呼び戻された。こうしてムハンマドはバシャシャのモスクのイマームを務めることになった。2 年間教える中で計 460 人の弟子（darasa）をもつまでになった。

ヒジュラ暦 1427 年ラマダン月 20 日（2006 年 10 月 13 日）のことである。ジンマ県各地のモスクのイマーム宛に文書が届いた。そこには、「キリスト教徒たちがバシャシャのモスクに放火しようとして謀っている」と訴え助けを求める内容がアラビア語で書かれてあった。翌日、ムハンマドを師と仰いでいた若者たちがジンマ県内各地だけでなくイルバボル県からもバシャシャのモスクに集まった。銃や槍、犁、それからガソリンの入ったジェリカンを持っていったという。そして真夜中になり徒歩で町の反対側にある教会まで赴き、祭りのために集まっていたキリスト教徒を襲撃したのである。

かつてバシャシャのムスリムとキリスト教徒は互いを尊重し合いながら仲良く暮らしていた。たとえば、殺された 6 人のキリスト教徒の 1 人にアッボイエ氏がいる。ウォツレガ出身のオロモであったアッボイエ氏は建築技師で、敬虔なキリスト教徒でありながら、ムスリムに対する敬意の念から、数多くのモスクの建設を無料で請け負った。Omo Quntulle 村や Genji Terami 村など 8～9 箇所にもモスクを建てた。また、バシャシャのモスクのために壁掛け時計を寄進した。また殺された女性の一人メヘレト・レッタはキリスト教徒だが、ムスリムと結婚した。彼女はティグライ人で夫亡き後、アガロ市で酒場兼宿（bunna bet）を営んでいた。ムスリム暴徒の襲撃を逃れてアガロに向かって走って逃げようとしていたところを暴徒に捕らえられて首を切られた。

このバシャシャ事件の数週間前に、同じくゴンマ郡のチャゴ村のガブリエル教会で放火

<sup>61</sup> この人物はバシャシャでの事件発生後行方をくらましており、筆者が聞き取りを行った 2015 年 8 月時点においてもまだ逮捕されていなかった。

事件があり、北部出身のアムハラ司祭 2 名が犠牲になった。さらに、隣接するイルバボル県のトバ町やヤチ町での教会で暴力事件があった。こうした小さな暴力事件が積み重なり、バシャシャで「爆発した」のである。

#### 4. 「共生」の政治化：アハバシ運動とアハル・アッスンナ・ワ・ルジャマア

前節で取り上げたバシャシャ事件は、ジンマ県だけで突発的に起きた事件ではない。現EPRDF政権下の宗教活動の「自由化」のもと、活動を表面化させた「ワハビーヤ」が原因とされる事件は、2000年以降、頻発している。

年	場所	概要
2006年5月	東部（ソマリ州）ジジガ市	ムスリム急進派が（コーランを冒瀆されたとして）キリスト教徒の自宅や商店に投石するなどして襲撃。
2006年7月	南部（オロミア州）ココサ郡ヘンノ町	2005年にムスリム2名がキリスト教に改宗したことに立腹したムスリム宗教指導者がムスリム住民を煽って福音派キリスト教徒を襲撃させた。50人以上が襲われ、12人が重傷を負った。
2006年9月	南東部（オロミヤ州）イルバボル県デンビ町	キリスト教徒がエチオピア正教会のマスカル（十字架発見）祭りを開催しようとしたら、ムスリムが妨害。双方が衝突した結果、5人死亡、100人が町を逃避 <sup>62</sup> 。
2011年3月	ジンマ県アサンダボ町	「キリスト教徒がコーランを侮辱した」として近辺の教会69棟が放火され、1人が殺害され、4000人のキリスト教徒が避難した。同年7月には事件に関わった被疑者558人に禁錮6ヶ月～25年の判決が下された <sup>63</sup> 。

<sup>62</sup> 2006年10月5日付スーダン・トリビューン記事  
([http://www.sudantribune.com/spip.php?iframe&page=imprimable&id\\_article=17975](http://www.sudantribune.com/spip.php?iframe&page=imprimable&id_article=17975)  
2016年2月19日入手)

<sup>63</sup> 2011年7月1日付ロイター・アフリカ記事

2011年4月	南部（南部諸民族州グラゲ県スルテ郡）ウォラベ町	ムスリムの若者4人が福音派キリスト教徒の牧師を集団で暴行・殺害。止めに入ろうとした牧師の妻は重傷を負った <sup>64</sup> 。
---------	-------------------------	--

これらの事件の特徴は、ムスリムが多数派を占める地域、それも南部でキリスト教徒が標的となっている点である。これは、国家としてのエチオピアが、北部キリスト教社会が南部のムスリムや在来宗教信者を征服することによって成立したという歴史的背景と関連している。それに加えて、2000年以降、南部地域では福音派教会が活動の幅を広げ、信者数が飛躍的に増加していることも関係していよう。南部地域では一部例外を除き、一般に（エチオピア正教系の）キリスト教徒は「征服者」「外来」（＝アムハラ）の宗教であるという見方が根強く残っている。だが、福音派教会の場合、（被征服民であった）オロモなど南部の諸民族の中からも大勢の信徒を獲得している。すなわちムスリムが過半を占めてきた地域において、信徒数を増やしているキリスト教徒の存在に対して危機意識を強めたことが原因であるともいえる。また、これら一連の事件を単純に「ムスリム対キリスト教徒」の対立によるものと説明することはできない。あくまで攻撃は一部のムスリムの過激派（しかも若者）に限られるのであり、「スーフイーヤ」はそこには含まれない。むしろ「スーフイーヤ」は、キリスト教徒との「融和的共存」を鮮明に打ち出すことによって「ワハビーヤ」との立場の違いを表明してきた。

また政府当局もこうした一連の事件を受けて、憲法で保障された宗教信仰の自由（第27条）や国家の宗教への不干渉の原則（第11条）よりも治安維持を優先して、ムスリム社会を二分する「ワハビーヤ」と「スーフイーヤ」のうち後者を支援する立場を表明した。政府は国内のイスラーム社会から「ワハビーヤ」を外国の「テロリスト」と関係をもつ危険分子として徹底的に疎外・排除し、「スーフイーヤ」で置換する手続きがとられた。

まず国内のイスラーム関連の事柄を管轄するイスラーム最高評議会<sup>65</sup>の構成員から「ワハビーヤ」と目された人物が排除された<sup>66</sup>。

(<http://af.reuters.com/article/ethiopiaNews/idAFLDE76016820110701?sp=true>)

<sup>64</sup> 2011年4月27日付 International Christian Concern 記事

(<http://www.aina.org/news/20110426215117.htm>)。

<sup>65</sup> イスラーム最高評議会は、9州2行政特別都市（ディレダワとアジスアベバ）の代表11人から構成される組織であり、各州から選出された11人が事務局を構成する。事務局は、議長（オロミア州代表）・副議長（アムハラ州代表）・書記局長（ガンベラ州代表）のほか、①ハッジとウムラ局（ティグライ州代表）、②教育と教宣（ダアワ）局（ソマリ州代表）、③モスクとアウカフ（寄進地）局（アジスアベバ代表）、④州と組織局（ベニシャングル・グムズ州代表）、⑤援助と開発局（ハラリ州代表）などの役職がある。また、イスラーム最高評議会とは別組織ではあるが、ウラマー評議会（ファトワ（イスラーム法判断）を發布する機関）の議長任命権や各州のシャリーア裁判所の裁判官任命権もイスラーム最高評議会にあるという。インフォーマント：シャイフ・ムハンマドアミン・ジャマル・ウマル（オロミア州代表・ジンマ県代表でもある）。2015年8月17日インタビュー実施。

<sup>66</sup> 2012年10月、抗議デモが全国各地で行われるなかエチオピア・イスラーム最高評議会の事務局構成員を選出するための地方選挙が全国で行われ、元サウジアラビア大使シャイ

ところが「スーフィーヤ」の代表勢力を国内で見つけることができなかつた政府は、エチオピア東部のイスラーム古都ハラル出身で1950年にレバノンに移住し1980年代に「イスラーム博愛主義協会 (Jam'iyat al- Mashari' al-Khayriyya al-Islamiyya)」を先導するようになったシャイフ・アブダッラー・アルハラリー (2008年没) の教えを支持し<sup>67</sup>、その教えをエチオピアのムスリム社会に教宣しようとしたのである (Erlich 2007)。通称「アルアハバシ」<sup>68</sup>と呼ばれるこの協会は、今日のイスラーム復興主義の礎を築いたとされる14世紀のイスラーム法学者イブン・タイミーヤやワッハーブ主義の祖である18世紀のムハンマド・アブドルワッハーブの教えを批判し、シャーフィイー法学派、アシュアリー神学派に従い、スーフィズムの正統化を図ったとされる12世紀のスーフィー、ガザーリーを支持する。政治的には穏健主義、キリスト教徒とは平和的共存を唱導するため、イスラーム社会では異端であるが、欧米先進国では支持者が多い (Mustafa Kahba & Haggai Erlich 2006)。

2011年7月、エチオピア・イスラーム最高評議会は、政府の後援を受けて、国内各地のイスラーム評議会の地方代表をエチオピア東部のハラマヤ大学に集めて21日間にわたる「セミナー」を開催した。セミナーでは、ワハビー主義の誤謬について解説したシャイフ・アブダッラー・ハラリーの著書が用いられ、教師はイスラーム博愛主義協会のレバノン人教師がつとめた<sup>69</sup>。エチオピア政府の後援を受けて行われたイスラーム最高評議会によるこの教宣活動に対して、それ以降、国内外の反対派が抗議行動を展開することになる。それまでイスラーム復興主義とは一線を画していた人々さえもが政府の宗教への介入を批判し始めた (Ficquet 2015)。

つぎに、政府がとった措置は、エチオピアで中心的なイスラーム教育施設であるアジスアベバのアウリヤ学校への対応である。アウリヤ学校は1950年代初頭に設立されたイスラーム学校で、1993年以降は国際イスラーム救援機関 (サウジアラビアに本部のある NGO) から資金面でも人材面でも支援を受けるようになっていた。そのため、イスラーム復興主義の中心的教育拠点とみなされるようになったのである<sup>70</sup>。

フ・キヤール・ムハンマドアマンが議長に選ばれた。

<sup>67</sup> 「イスラーム博愛主義協会」は、1930年にレバノン人 Shaykh Ahmad al-'Ajuz によって設立された。創設者シャイフ・アフマド・アジューズは1983年に死去するまでエチオピア出身のシャイフ・アブダッラーを支持したとされ、その死後、シャイフ・アブダッラーが同協会を先導するようになった。同協会は、レバノンを本部とするが、エジプトなど中東諸国だけでなく、オーストラリアなど欧米諸国にも支部をもつトランスナショナルな組織となっている。

<sup>68</sup> 「アルアハバシ (al-Ahbash)」は「エチオピア人たち」を意味し、イスラーム復興主義者たちが「イスラーム博愛主義協会」に対してつけた蔑称である (Mustafa Kahba & Haggai Erlich 2006)。

<sup>69</sup> 全国85県からそれぞれ13名のムスリム教員を集めてセミナーが行われた。レバノン人教師は20人動員された。インフォーマント：シャイフ・アフマド・アジューズ (元イスラーム最高評議会会長、2009~2013)。2015年8月17日インタビュー実施。

<sup>70</sup> サウジ拠点とするイスラーム復興主義者たちが、エチオピアのアウリヤ学校を東アフリカの教育拠点にしていたという内部事情を暴いたのは、アウリヤ学校内の民族対立の結果スルテ人スタッフから追放されたオロモ人スタッフであるという。インフォーマント：シャイフ・アフマド・アジューズ (元イスラーム最高評議会会長、2009~2013在任)。2015年8月17日インタビュー実施。

そこで政府はまず 2011 年 9 月にアウリヤ学校の運営をイスラーム世界連盟から切り離し、2011 年 12 月アウリヤ学校で働くアラビア語教員を追放した (Ficquet 2015)<sup>71</sup>。2012 年 1 月、学校運営への政府の介入に対してアウリヤ学校校内で抗議デモが行われ、これを皮切りに国内各地 (特にアジスアベバ市内のアヌワール・モスクとアウリヤ学校) のモスクで定期的に抗議集会が開かれるようになる。さらに、2012 年 4 月、(故) メレス首相 (当時) が国会で、アルシとバレ地方のモスクで行われた抗議行動の扇動者を「アルカイダ」の影響を受けた過激派分子と呼んで非難したことでさらに抗議行動が激化した。そして 2012 年 7 月 13 日 (金) 夕刻、アウリヤ学校で「サダカ」プログラムを実施するためと称して大勢の「ムスリム」が集まっていたところ連邦警察が突入し大勢が逮捕され、一部負傷者が出るという事件が起きた (石原 2014:89)。これは、数日後に開催される予定であったアフリカ連合 (AU) の首脳会合の時に各国元首の前でエチオピア政府に対する抗議行動を実施しようとしていたものであった。逮捕された「ムスリム」のうち 3 割が、イスラーム復興主義者から日当 250~300 ブル (1250~1500 円) ほどとジャラビーヤ (ムスリム男性が着用する白い長衣) を渡されてデモに参加するようにリクルートされたキリスト教徒であったという<sup>72</sup>。

こうしてイスラーム最高評議会とアウリヤ学校を統制下においた政府は、民衆レベルでも「ワハビーヤ」を排除すべく、2013 年 7 月にイスラーム系 NGO、「エチオピア・アハル・アッスンナ・ワル・ジャマア・アッスフィーヤ協会 (以下、アハル・アッスンナ協会)」を認可した。この協会は、アムハラ州のムスリム宗教指導者でカーディリー導師であるハッジ・スラジが創設した組織で、「スーフィーヤ」の活動を支援する組織である。その活動内容は、預言者ムハンマドのスナ (言行) を教え広める教宣活動、著名な宗教指導者や聖者の墓廟やハドラの場を守る保護活動などがあるが、その目的の一つに「国の平和と発展のために政府と協力してワハビーヤが国内に侵入して活動しないように」監視する、というものがある。そのために、全国 9 州 2 特別行政都市のうち、2 州 (ソマリ州・アファル州) をのぞく 9 つの行政自治体で活動を展開中である。各自治体では、県・郡・カバレまでの組織を設け、民衆レベルで「ワハビーヤ」排除のネットワークを広げようとしている。イスラーム最高評議会とは直接関係していないが、イスラーム最高評議会の代表者選挙を実施する際、候補者に「ワハビーヤ」が滑り込まないように監視しているという<sup>73</sup>。協会側は、

---

<sup>71</sup> 筆者は 2011 年 8 月、アジスアベバに二校あるアウリヤ学校 (一校は 1~8 年生の学校で、もう一校は幼稚園~12 年生、さらに 2006 年からは短期大学・病院・孤児院も併設された) を訪問した。だが、筆者はその時不覚にも、その後アウリヤ学校が「イスラーム復興主義者の温床である」と政府から非難を受けることになるとは想像もしておらず、大学の組織やカリキュラム、設立経緯や学生数・教員数に関する事柄を聞き取ったに過ぎない。その時学校長からは、教員構成は全員エチオピア人で、サウジアラビアのメディナ大学やカイロのアズハル大学、スーダンのアフリカ国際大学等で学位を取得してきた人々であると聞いていた。ただ、興味深いのは、インタビューを終了して学校から出ようとしていた時、アラブの風貌漂う人物がエチオピア人に囲まれて校内を歩いているのに出くわした。案内人は、彼がアラブからきた客人であるとしか教えてくれなかったが、アウリヤ学校がアラブ諸国と人的交流が当時まだあったことをうかがい知ることができる。

<sup>72</sup> インフォーマント：シャイフ・アフマッディーン・アブダッラー (元イスラーム最高評議会会長、2009~2013 在任)。

<sup>73</sup> インフォーマント：ハッジ・サラフッディン・ディンカ (アハル・アッスンナ・ワルジ

政府やイスラーム最高評議会からは自立していると主張しているが、イスラーム最高評議会代表選出選挙での関わりや「政府との協力」や「監視」を設立目的に掲げている点からみても、その関係は明らかであり、「ワハビーヤ」という「雑草」を草の根レベルで「除草」する役割を担っている。

もっとも政府当局による「アハル・アッスンナ協会」への支援は、「ワハビーヤに対する監視」としての役割を期待するだけのようである。2009年にNGOの活動を規制する、いわゆる「NGO法」<sup>74</sup>発布以降、合法的組織として認可を受けることが難しくなっているなかで、認可を受けたのは、「政府系イスラーム」である「スーフイーヤ」を打ち出したからであろう。だが、筆者が2015年に訪れた「アハル・アッスンナ協会」本部は、その資金繰りの難しさを物語るように、粗末な古めかしい建物のなかにあった<sup>75</sup>。そのため協会本来の設立目的である教育や教宣、保護活動に割り当てる予算がほとんどないのが実情のようである。産油国やアラブの援助機関とコネクションをもつ「ワハビーヤ」系の個人や組織とは対照的であると言わざるを得ない。

## おわりに

ジンマ県は19世紀以降イスラームが段階的に導入され、現在では8割以上がムスリムである。当初王侯貴族の宗教であったイスラームが、民衆へ浸透するのに大きく貢献したのがタリーカ（スーフイー教団）とその導師となった人々である。タリーカは、導師に対する崇敬行為や祈祷集会など、在来信仰と親和性をもちながらイスラームを民衆の間に広める触媒となった。タリーカの中でも、ハッジ・ユースフやアルファキー・アフマド・ウマルなど導師に恵まれたティジャーニーヤがジンマ県で根付き、いまや「スーフイーヤ」の中心となっている。2000年以降ジンマはじめ国内各地で起きた教会襲撃事件は、政府が「ワハビーヤ」を排除する口実を与え、「ワハビーヤ」ともとより対立していた「スーフイーヤ」を政府が支援する道筋を作った。だが、政府は「ワハビーヤ」への対抗馬として「スーフイーヤ」を支援しているだけで、「スーフイーヤ」をどのように教育・発展させるのか、その方法を打ち出せないでいる。

政府は2010年以降、キリスト教諸派やムスリムの共存や対話を促すコンソーシアムやNGOを認可した。2013年8月には、政府はそうしたNGOや組織を巻き込んで、「共存 (coexistence)」「寛容 (tolerance)」をキーワードにした宗教対話集会を開催した。「共存」と「寛容」は、多民族・多宗教国家であるエチオピアという国を平和的に運営・発展させるための政治的ジャーゴンとなっている。だが、そうした政治的パフォーマンスだけでは、民衆レベルでの「共存・寛容」は実現しない。そもそもムスリムの中でも「スーフイーヤ」

---

ヤマア・アッスーフイー協会事務局長)、2015年8月20日実施。

<sup>74</sup> 「チャリティーと社会 (Charities and Societies)」法 (法令第621/2009) は2009年に発布され2010年から施行されている。

<sup>75</sup> 500万人いるとされるメンバーに対しては、1月あたり会費として5ブル以上 (30円) の支払いを義務付けているという。だが、本部の家賃1万2000ブルや本部に駐在するスタッフ7人の給料は、会費から工面しているという。インフォーマント：ハッジ・サラフディン・ディンカ (アハル・アッスンナ・ワルジャマア・アッスーフイー協会事務局長)、2015年8月20日実施。

はキリスト教徒とは従来融和的な関係を築き上げてきたのだから、今更「共存・寛容」を繰り返される必要はない。むしろ問題は、イスラーム復興主義者に「共存・寛容」の重要性を認識を促す方法があるのかどうかという点である。

一つのやり方としては、正面切って宗教間対話を行うのではなく、通常 of 社会生活のなかで相互扶助的関係を築き上げるという方法である。第三節で取り上げたバシャシャ事件の場合、事件前に解体された街区ごとの葬式講 (iddir) が再組織された。葬式講は、本来宗教に関係なく住宅街ごとに編成され、近隣の住民が死去した際には、埋葬や葬式の開催を助け合うのが慣例である。それが、バシャシャの場合、2006年の事件が起きる数年前にキリスト教徒が追い出される形で解体されていた。事件後、葬式講は再組織され、キリスト教徒もムスリムも相互の葬式に出席し、助け合う関係を回復する努力がなされた。最近では、キリスト教徒とムスリムの平和的共存が実現したモデル・ケースとして取り上げられ、全国から郡の代表が見学を訪れるそうである<sup>76</sup>。

ジンマ県ゴンマ郡でキリスト教徒・ムスリムが共住する村で調査を実施した松村(2014)も、病気や死、その他日常的な困窮に対処する場面において宗教の違いが乗り越えられることがあると指摘している。日常生活を営む上で、どうしても宗教の差異が顕在化してくる時がある。結婚や食事がよい例である。だが、日頃よりムスリムとキリスト教徒が隣り合わせで暮らしている場合には、宗教の差異は絶対的な境界とはならないのである。

政府は、イスラーム最高評議会・アウリヤ学校・「アハル・アッスンナ・ワルジャマア・アッスーフィーヤ協会」という3つの組織を介して国内のムスリム社会から「ワハビーヤ」を排除しようとしているが、むしろ重要なことは、イスラーム復興主義者を一括りに「ワハビーヤ」(ひいてはテロリスト)と呼んで排除せず、イスラーム復興主義者の立場や主張を尊重しながらも、平和的な社会生活を営むことができるようなチャンネルを作り出すことではないだろうか。イスラーム復興主義は宗教の刷新や社会改革を唱える、すなわち「公共の善」を志向する一面もある。イスラーム復興主義者がめざす「公共の善」を「スーフィーヤ」と共有できるようなチャンネルを作り出すことで双方の間を隔てる壁もなくなっていくのではないか。

ゴンマ郡の「ムフティー」は、イスラーム復興主義的な考え方を持っていたかもしれないが、預言者ムハンマドの生誕祭を非難したり、タリーカを否定したりはしなかったという。インフォーマントは、ムフティーの死によって「ワハビーヤ」の活動が暴力的になったという側面もあると指摘している。「ムフティー」は、「ワハビーヤ」「スーフィーヤ」双方の中間に立ち、双方から尊敬される宗教指導者であった。その意味で「危機」を「再生」に転換するスイッチを握っていたのである。だが「ムフティー」は死んだ。「アハル・アッスンナ協会」はそのスイッチを受け継ぐことができるだろうか。今後の動向に注目したい。

## 参考文献

---

<sup>76</sup> インフォーマント：バシャシャの副代表シャイフ・アブドゥルカーディル・アッバ・ガロ。2015年8月15日ジンマ市内でインタビューを実施した。

Abbink, Jon

- 1998 “An Historical-Anthropological Approach to Islam in Ethiopia: Issues of Identity and Politics,” *Journal of African Cultural Studies*, 11-2: 109-124.
- 2011 “Religion in Public Spaces: Emerging Muslim-Christian Polemics in Ethiopia,” *African Affairs*, 110-439: pp.253-274.

Abdulkarim Abba Garo

- 1988 ‘The History of Jimma Kingdom under Aba Jifar II, 1877-1933’, unpublished B.A. Thesis, The Department of History, Yekatit ’66 Institute of Political Education.

Asmarom Legesse

- 1973 *Gada: Three Approaches to the Study of African Society*, New York: The Free Press.

Bahru Zewde

- 2005 “Dästa Damtäw”, Siegbert Uhlig (ed), *Encyclopaedia Aethiopica* Vol. 2, p.105, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Borelli, Jules

- 1890 *Ethiopie Meridionale, Journal de Mon Voyage aux Pays Amhara, Oromo et Sidama, Septembre 1885 a Novembre 1888*, Paris: May & Motteroz.

Bustorf, Dirk

- 2007 “Kätäma,” in Siegbert Uhlig (ed), *Encyclopaedia Aethiopica* Vol. 3, pp.355-359, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Cecchi, Antonio

- 1886 *Da Zeila alle Frontiere del Caffa* Vol.2, Roma: Ermanno Loescher & Co.

Cerulli, Enrico

- 1922 *Folk Literature of the Galla of Southern Abyssinia*, Cambridge: The Peabody Museum of Harvard University.
- 1933 *Etiopia Occidentale Vol.1*, Roma: Sindacato Italiano Arti Grafiche.

Eide, Øyvind M.

- 2000 *Revolution and Religion in Ethiopia, 1974-85*, Oxford: James Currey.

Erlich, Haggai

- 2007 *Saudi Arabia and Ethiopia: Islam, Christianity, and Politics Entwined*, Boulder & London: Lynne Rienner Publishers.

Feiruz Surur & Mirgissa Kaba

- 2000 “The Role of Religious Leaders in HIV/ AIDS Prevention, Control, and Patient Care and Support: a Pilot Project in Jimma Zone” *Northeast African Studies* 7(2): 59-79.

Ficquet, Éloi

- 2006 “Flesh Soaked in Faith: Meat as Marker of the Boundary between Christians and Muslims in Ethiopia,” in Benjamin F. Soares (ed), *Muslim-Christian Encounters in Africa*, pp. 39-56, Leiden: Brill.

- 2015 “The Ethiopian Muslims—Historical Processes and Ongoing Controversies,” in Gerard Prunier & Eloi Ficquet (eds.), *Understanding Contemporary Ethiopia*, pp. 93-122, London: Hurst & Company.

Ghelawderos Araia

- 2011 “WOLLO: Microcosm Ethiopia and Exemplar of Ethiopian Unity,” <http://www.africanidea.org/Wollo.pdf> (2016年2月26日取得)

Guluma Gemedra

- 1993 ‘The Islamization of the Gibe Region, Southwestern Ethiopia from c. 1830s to the Early Twentieth Century’, *Journal of Ethiopian Studies* Vol.26 No.2, pp. 63-79.

Harris, Major W. Cornwallis

- 1844 *Highlands of Æthiopia*, Vol.III, London: Longman.

Hussein Ahmed

- 1994 ‘Islam and Islamic Discourse in Ethiopia (1973-1993)’, Harold G. Marcus (ed), *New Trends in Ethiopian Studies*, Vol.1, pp. 775-801.
- 2001 *Islam in Nineteenth-Century Wallo, Ethiopia*, Leiden: Brill.
- 2006 “Coexistence and /or Confrontation: Towards a Reappraisal of Christian-Muslim Encounters in Contemporary Ethiopia,” *Journal of Religion in Africa* 36-1: 4-22.

石原 美奈子

- 1996 「オロモのクランの歴史研究の可能性について」『アフリカ研究』49: 27-52.
- 1997 “The Life History of a Muslim Holyman: *Al-Faki Ahmad Umar*,” K. Fukui, E. Kurimoto, and M. Shigeta (eds.) *Ethiopia in Broader Perspective (Papers of the XIII<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies)*, Vol.II, pp. 391-402, Kyoto: Shokado.
- 2006 ‘The Religious Roles of the Naggaadie in the Historical Gibe Oromo Kingdoms’, Siegbert Uhlig (ed), *Proceedings of the 15<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies*, pp.119-127, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 2007 「エチオピア帝国への包摂と地方の形成—旧ギベ 5 王国の事例を通して—」福井勝義編著『抵抗と紛争の史的アプローチ—エチオピア 国民国家の形成過程における集団の生存戦略—』pp. 72-96、京都大学大学院人間・環境学研究科福井研究室。
- 2009a 『エチオピアのムスリム聖者崇拝—ティジャーニー導師アルファキー・アフマド・ウマルと西部オロモ社会—』東京大学大学院提出博士論文
- 2009b 「近代エチオピア国家形成と異教『共存』—皇帝・霊媒師・踊る精霊たち—」宮沢千尋編『社会変動と宗教<再選択>—ポスト・コロニアル期の人類学研究—』pp.137-175、風響社。
- 2013a “The Formation of Trans-Religious Pilgrimage Centers in Southeast Ethiopia: Sitti Mumina and the Faraqasa Connection,” in Patrick Desplat & Terje

Ostebo (eds.), *Muslim Ethiopia: The Christian Legacy, Identity Politics, and Islamic Reformism*, pp.91-114, New York: Palgrave Macmillan.

2013b 「コーヒーの意味と価値の変容－エチオピア南西部の事例－」『人類学研究所研究論集』1: 150-180。

2014a 「序」石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家－エチオピア 神々の相克と共生－』pp.1-13、風響社。

2014b 「国家を支える宗教－エチオピア正教会－」石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家－エチオピア 神々の相克と共生－』pp.25-87、風響社。

2014c 「国家に抗う宗教－イスラーム」石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家－エチオピア 神々の相克と共生－』pp.89-156、風響社。

伊藤 義将

2012 『コーヒーの森の民族生態誌－エチオピア南西部高地森林域における人と自然の関係－』（京都大学アフリカ研究シリーズ 007）松香書店

Lange, Werner J.

1982 *History of the Southern Gonga (Southwestern Ethiopia)*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Massaja, Guglielmo

1889 *I Miei Trentacinque Anni di Missione nell'Alta Etiopia*, Vol. 6, Roma: Tipographia Poliglotta.

松村 圭一郎

2014 「対立を緩和する社会関係－ジンマ農村のムスリムとキリスト教徒－」石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家－エチオピア 神々の相克と共生－』風響社。

Meron Zeleke

2015 *Faith at the Crossroads: Religious Syncretism and Dispute Settlement in Northern Ethiopia: A Study of Sufi Shrine in North Eastern Ethiopia*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Mohammed Haasen

1990 *The Oromo of Ethiopia, A History 1570-1860*, Cambridge: Cambridge University Press.

Mustafa Kahba & Haggai Erlich

2006 “Al-Ahbash and Wahhabiyya: Interpretations of Islam”, *International Journal of Middle East Studies* 38: 519-538.

Østebø, Terje

2012 *Localising Salafism: Religious Change among Oromo Muslims in Bale, Ethiopia*, Leiden: Brill.

大塚 和夫

1989 「あご髭とヴェール－衣裳からみた原理主義運動－」『異文化としてのイスラーム』pp.231-284、同文館。

Teshome Berhanu Kamal

2012 (2004 EC) *Mechachal*, Addis Ababa: publisher not mentioned (in Amharic)

Trimingham, J. Spencer

1952 *Islam in Ethiopia*, London: Oxford University Press.

**Keywords**

Ethiopia, Oromo, Islam, Co-existence, Religious Conflict